２０２４年１月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

１月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１８日(木)、ＮＨＫ仙台放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、「ＮＨＫ経営計画　2024-2026 年度」の概要についての説明があり、議事に入った。

会議では、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	松沢　卓生（株式会社松沢漆工房　代表取締役）
副委員長	佐々木　裕司（東北電力株式会社　常務執行役員）
委　員	丑田　香澄（一般社団法人ドゥーラ協会　理事）
	昆野　勝栄（河北新報社　論説委員会論説委員）
	佐藤　多恵（シンガーソングライター）
	武田　靖子（株式会社ジョイン　専務取締役）
	永井　温子（株式会社 Ridun　代表取締役）
	中嶋　嘉津子（一般社団法人仙台市障害者スポーツ協会　理事）
	前川　直哉（福島大学教育推進機構高等教育企画室　准教授）
	渡邊　享子（株式会社巻組　代表取締役）

（主な発言）

＜放送番組一般について＞

○　１２月２２日(金)の純烈の東北であったまろう旅 秋田編(総合 後 7:57～8:42 東北ブロック)を視聴した。災害やコロナ禍などで苦しむ温泉地を応援したいという趣旨の番組で、昨年は水害もあった五城目町へ歌謡コーラスグループの純烈に訪れてもらい、地元に住むひとりとしてありがたい機会となった。大雨被害からの復興の様子を伝えたり、地域住民が数多く出演したりと、人の魅力も含んだ町の魅力を伝える味わい深い紀行番組だと感じた。視聴者のみならず、番組が訪れたその地を元気にしてくれる企画だと思う。一方で、魅力を伝えるという点では、よく知られた場所が多くを占めてしまうともったいないと感じる。純烈が訪れたからこその想定外の出会いや掛け合いが生まれるような余地が一部でもあると、さらに深みが生まれて魅力ある番組にな

るのではないかと期待している。

○　純烈の東北であったまろう旅 秋田編を視聴した。純烈４人の人柄が伝わり、五城目の人たちが、純烈が来ることを心から楽しんで喜んでいることが映像からも分かった。番組の終盤には、番組で出会った人を呼んで純烈のライブが行われたが、その盛り上がりには驚かされた。シリーズとして今後も続くのであれば、より厚みのある内容になっていくことを期待したい。

○　１２月３１日のゆったり温泉ひとり旅「青森・酸ヶ湯温泉」(総合 後 1:50～2:19 東北ブロック)を視聴した。乳白色の湯の色やかけ湯の水音、湯けむりが醸し出す温かさなど、映像と音声からにおいまでをも感じ取れるかのように魅力を伝えていた。温泉だけでなく、湯治宿の従業員のもてなしや、地元食材の料理、自然の景色、宿の部屋にある小物一つ一つに至るまで、湯治場の雰囲気をよく表しており、温泉地の魅力を伝えていた。１人称の旅人目線の映像でひとり旅を疑似体験する構成だが、声の出演をしていた俳優・吉岡秀隆さんのどこか陰影を感じさせる語り口は、今回の番組で設定されていた湯治客の人となりにはまっていた。

○　１月４日(木)に再放送された東北ココから「あなたの町の映像アルバム～ふるさとを語りあおう～」(総合 後 6:10～6:37 仙台･山形･青森ブロック)を視聴した。番組で取り上げられた女川や南三陸は、東日本大震災で壊滅的な打撃を受け復興途上にある町であるから、その町のかつての映像は懐かしさやつらさが交錯した複雑な受け止めになったのだろうと、出演者のコメントに耳を凝らして視聴した。地震や津波により失われた日々や風景への追慕の念と、前を向いて生きようとする心の葛藤がうかがえた。将来は町の担い手となる高校生が、つらい思い出を抱えながらも今の生活を笑顔で語る様子からは、震災から立ち直ろうとする町を象徴する雰囲気を感じ、映像を見る地元出演者のバランスもとてもよかった。

○　１月５日(金)に再放送された東北ココから「あなたの町の映像アルバム～青森・宮城編～」(総合 後 6:10～6:37 仙台･山形･青森ブロック)を視聴した。宮城編で映された仙台の映像からは、第２次世界大戦後の元気がないところから、町が大きく賑やかになった様子、さらに東日本大震災と、歴史の流れを映像から理解できた。青森編の大鰐町は身近な場所だが、今では町に長年住む人たちの話からしか聞けない昔の暮らしや 1960 年の水害について、映像を通して実感を伴って理解できた。「あなたの町の映像アルバム」シリーズはいつも和やかな気持ちで見ているが、今回は大鰐町が将来どうなってしまうのだろうと、不安を抱いた。番組は思い出を振り返るアルバムの役割は果たしているが、その先にあるべき視聴者に届けたい思いやねらいが不明確

だった。縮小していく町の過去を伝えることは重要だと思うが、もう少し具体的な問題提起へとつながる内容となるとより良いのではないか。

○　１月５日(金)に再放送された東北ココからを視聴した。第２次世界大戦の終戦から１か月の仙台市街の様子や、話でしか聞いたことがなかった路面電車が映像で残っていて見られることがすばらしいと思った。仙台駅前にある商業ビルの変遷や、仙台発祥とも言われるルーズソックスの流行など、宮城県に住んでいても知らなかったことを、番組を通して知ることができた。青森編の大鰐町もローカルな話から発見や学びが多く、古い映像も鮮明に残している映像管理や取材力に感心させられた。この番組は、見ている人を笑顔にする力があるうえ、その地の歴史も知ることができ、若い人が見ても感心できる番組だと思う。

○　１月６日(土)に再放送されたみちたん～ああ！すばらしきセカイ～「ぶっ飛んだ！衝撃で４７回目」(総合 前 9:30～10:00 東北ブロック)を視聴した。東北には、当事者にはその認識がなくとも、端から見ると特徴的な取り組みで頑張っている人が数多くいるので、少し斜め上の切り口から地域のディープな良さを掘り下げていく番組の放送はとても共感できる。ナビゲーターの俳優・田中要次さんは地域の人間性をフォーカスしてくれる方で、絶妙な人選で楽しく見られた。手書き調の題字やキャラクターなど、クリエーティブが全体的にかわいらしく、若者や女性が共感しやすくなる工夫を感じる。

○　１月６日(土)の釣りびと万歳「三陸の怪獣クロソイに挑む～ノッチ　岩手・釜石沿岸～」(総合 10:30～10:59 東北ブロック)を視聴した。お笑いタレントのノッチさんが明るく番組を進行していたのが終始楽しく、釜石沿岸の海や釣りの魅力が伝わった。釜石で釣り具店を営む出演者の説明がわかりやすく、ことばの選び方がすてきで、理解が深まった。目的の魚を釣ることはできなかったものの、釜石沿岸の景色やアクティビティー、海の幸を紹介したり、アニメーションを活用して釣りのノウハウを伝えたりして、飽きさせない工夫が見られた。不確定要素が大きい自然を相手にする番組でも、限られた時間の中で楽しめる内容にする構成力に感心した。

○　１月１２日(金)の東北ココから「鯨の町ふたたび～宮城 鮎川浜～」を視聴した。東日本大震災で大きな打撃を受けた地域ではあるものの、震災を前面に出した切り口ではなく、地域の再生に取り組むさまざまな人を取り上げていた。震災前から人口が減っていた地域だが、鯨を解体する技を受け継ぐ職人には若い息吹を感じたり、地域に伝わる踊りを舞う女性たちには元気をもらったりと、歴史や文化を尊重しながら地域を再生しようとする姿が感慨深かった。「東北ココから」は取り上げた題材の今後

を楽しみにしたいと思える、引きつけられる番組だ。

○　１月１２日の東北ココからを視聴した。鯨が水揚げされるシーンは、血がにじむ鯨から目を背けたり臭いを気にしたりする子どもの様子が映されていて、五感で捕鯨文化が伝わっている様子が分かった。鮎川七福神舞を行う女性たちからは、７０年前から伝わる祭りを受け継ぐという強い気持ちが伝わってきた。性別や年齢によらず、それぞれの立場で捕鯨文化を残していく姿に励まされた。担い手が減っていく文化や、人口が減る町をどう残していくのかということは日本中にある課題だと思うので、若い人が受け継いでいこうとしている鮎川の様子を伝えることは意義深い。捕鯨最盛期の鮎川浜を伝えるモノクロの資料映像に驚いたと同時に、文化を残すという番組や放送の役割も感じられた。海上での捕鯨の様子や商業捕鯨についての歴史的、制度的な背景も番組で紹介されると、より理解が深まったのではないか。

○　１月１３日(土)の被災地からの声 つぎの一歩「福島県双葉町」を視聴した。番組冒頭で司会の津田アナウンサーが、この番組がＮＨＫプラスで全国で視聴できることを断った上で、能登半島地震の被災者にメッセージを話していたが、番組の性質に合致していて重要だった。ナレーションがなくインタビューとテロップのみで構成される番組のスタイルは、避難指示が一部で解除されてから１年５か月ほどたった今も、住民票人口の２％ほどしか帰還していない双葉町の現状を伝えるのに合っていた。帰還した人だけでなく、避難先で災害公営住宅や新居に住む人の声も取り上げていて、みんな笑顔だったが、見ていて自然に涙があふれてきた。原発事故により故郷を追われた、福島県沿岸地域に特有の状況を考える上で大切だったと思う。ふるさとに戻りたくても戻れないさまざまな事情や、帰還困難地域に指定され戻りようのない人の声など、番組を通して繰り返し伝えてもらいたい。

○　１月１３日(土)の大好き♡ 東北 定禅寺しゃべり亭「～楽天アンバサダー銀次～」を視聴した。銀次さんがプロ野球選手を引退したあと、どのような活動をしていくのか関心を持っている東北の視聴者は多いと思われ、今回の出演はタイムリーであった。銀次さん自身が、これまでの東北に寄り添った活動を振り返りながら、野球への情熱やこれからの夢を直接語ってくれたのはとてもよかった。出身地の岩手県普代村の人のインタビューでは、銀次さんの人柄が分かるエピソードがたくさんあり、地元に愛されていることがあらためて伝わった。公開生放送の会場では、来場していた子どもとの掛け合いもあり、タイミングよく拍手が起こるなど、温かい雰囲気が感じられた。「定禅寺しゃべり亭」は東北にゆかりがあるゲストからさまざまな形で東北への愛を引き出している番組だと感じる。

○　１月１７日(水)のはまなかあいづＴＯＤＡＹを視聴した。阪神・淡路大震災から２９年目の日の放送で、震災に関する市民団体のセレモニーを番組の冒頭に取り上げていた。神戸や能登半島地震の被災者に対する福島からのメッセージが放送され、福島県内の視聴者に共感してもらえたのではないか。災害大国であるが防災大国になれていない日本で、どのように防災意識を高めていくかが重要で、そのための一歩が伝承や語り部だと思うので、そのような観点からもこうした取り組みを取り上げてほしい。

○　１２月２５日(月)のＹＯＡＳＯＢＩ１８祭「ＹＯＡＳＯＢＩと１０００人の１８歳で作る一夜限りのステージ」(総合 後 10:00～11:15)を視聴した。若者のリアルな気持ちや葛藤を聞くことができ、話を聞くだけでも引き込まれた。「心音」というテーマでの応募動画は、自分なりの「心音」を伝える表現にひとりひとりの個性が出ていてとてもよかった。音楽ユニット・ＹＯＡＳＯＢＩのふたりの音楽の原点を知ることができたとともに、人柄の良さが伝わってきた。ボーカルのｉｋｕｒａさんのインタビューを聞くと、自身の１０代の頃の不安な気持ちを思いだした。番組を通して 1000 人の参加者が殻を破って明るく変化していく姿や、合唱のパフォーマンスに感動した。参加者ひとりひとりの表情が分かるカメラワークがすばらしく、エンドロールで全員の名前を紹介していたのも見やすかった。来年の１８祭も楽しみだ。

○　１２月３１日(日)の第７４回ＮＨＫ紅白歌合戦を視聴した。「ボーダレス」とのテーマどおり、演歌歌手と若いアーティストのコラボなど、世代やジャンルを超えての組み合わせが多く、とてもよい試みだと思った。歌手のスタイルに合わせて歌詞の表示や映像の撮り方を工夫するなどこまやかに対応していてよかった。ただ、純烈が歌唱した際には、ＮＨＫプラスへの誘導を目的とした２次元コードがデザインされた衣装が目立っていて、歌にまったく集中できなかった。三山ひろしさんのけん玉のギネス世界記録へのチャレンジでは、生放送では歌唱直後に「成功した」と誤ったアナウンスがあったものの、ＮＨＫプラスでは該当場面でそれを打ち消すような表記が出て、配慮を感じた。「ボーダレス」というテーマは加味されていた一方、全体として音楽の傾向に偏りがあったようにも思え、世代を問わず楽しめる紅白ではなかったとも感じる。

○　第７４回ＮＨＫ紅白歌合戦では陸上女子やり投げの北口榛花さんや車いすテニスの国枝慎吾さんが審査員をしており、世界トップレベルのアスリートが審査員に選ばれると、パラスポーツも含めて関心が高まるきっかけになると思う。

○　第７４回ＮＨＫ紅白歌合戦がきっかけで「有吉のお金発見 突撃！カネオくん」を視聴した。題名は以前から知っていたが、「紅白歌合戦」のコーナーで紹介されてお

り、今まで見ていなかった番組を見る機会となった。「突撃！カネオくん」は初めて知る情報の連続でおもしろく、「紅白歌合戦」は新しい番組やサービスに出会うきっかけとしてもありがたいと感じた。歌番組としても、「紅白歌合戦」でしか実現しない異色のコラボレーションがたくさんあり、親子で楽しめる内容だった。

○　ゆく年くる年「2023」（総合 12 月 31 日(日)後 11:45～1 月 1 日(月)前 0:15）では、秋田県の三吉神社から中継があり、大雨や熊の被害などかつてない自然脅威があった秋田の祈りや願いを伝えてくれた。年が明けて能登半島地震と、想像を絶する年始めとなったが、喜びを共有して視聴者を元気にしたり、命を守るという視点で必要な情報を届けたりと、ＮＨＫが多角的な情報を届ける場となっていることをあらためて感じた。

○　１月９日(火)の「子どもがいない世界」がやってくる？(総合 後 11:45～10 日(水)前 0:39)を視聴した。少子化問題は国の最重要課題とは言われているものの、一般の人にはどこかひと事のように感じられ、身に迫った危機感が足りない中で、ただ警告を鳴らすだけでなく、少子化の実態や原因を一人一人が自分なりに捉えて、本当の危機として認識しなければならないと感じさせる番組であった。日本と世界の少子化の現状や、人々の価値観や生き方の多様化と変化を具体的なデータやインタビュー、さまざまな背景や考えを持ったスタジオのゲストのコメントで伝え、他人任せにしてはいけないという気持ちにさせられた。出演者のお笑いタレント・大島美幸さんが自身の経験に基づいた捉え方で子育てや少子化について前向きな発言をしており、深刻な内容の中でも、重要な役割を果たしていて好感が持てた。

○　１２月１６日と２３日の【土曜ドラマ】デフ･ヴォィス 法廷手話通訳士 「前編『記憶の中の少女』」と「後編『もうひとつの家族』」（総合 後 22:00～23:13）を視聴した。耳が不自由な俳優も、日頃よく見る俳優も本当にこん身の演技で、サスペンスドラマとして一級のエンターテインメントだった。耳が聞こえない両親をもつコーダと呼ばれる子どもが、生きづらさを抱えて生育していくという、ヤングケアラーにも通じる深刻な課題があることを初めて知った。手話について、手話通訳を見る場面は増えてきてはいるものの、独立した言語文化としての手話についていかに知らないことが多いか気付かされた。

○　１月６日のＥＴＶ特集「未来会議～ばらばらな私たちが始めた、小さな対話～」を視聴した。2023 年７月１４日(金)の東北ココから「福島・未来会議 ～対話から生まれるもの～」からさらに掘り下げて、今回は、主催者のみならず参加者ひとりひとりの問いの深まりに迫る取材で、対話の力が生かされていることが伝わってきた。震災

や原発事故で生じた価値観の違いや、相手のことばを否定しないというルールで１０年以上続いてきた対話活動を全国に伝えられたことは意義があった。参加者が、官僚や原発の関係者、避難者といった肩書や立場にとらわれずに対話をすることは、民主主義の最も基盤となるものである。実践が難しく感じるが、福島以外の地域でも考えるきっかけになるとよい。

○　１月１３日に再放送されたＥＴＶ特集「未来会議～ばらばらな私たちが始めた、小さな対話～」を視聴した。2023 年７月の「東北ココから」の内容が「ＥＴＶ特集」として厚みを増して全国放送されたのはとても意義があった。福島の県民が対話を重ねる未来会議は、それぞれの意見を闘わせるのではなく、意見が異なっていてもまず相手のことばを否定しないで聞いてみるという進め方で１０年も続いてきた。もやもやは残るが、日本で最もデリケートで葛藤があるテーマに果敢に取り組み、苦労はありつつ手ごたえも感じているからこそ続いていると感じた。原子力規制庁の官僚が、私人の立場で対話に参加している場面では、個人の思いと組織の立場とのジレンマが表されており興味深かった。行政の在り方や仕組みに何か欠陥があるのではないか、と考えを巡らせるきっかけとなる番組だった。

○　１月１２日(金)ＳＥＥＤ　なやみのタネ「スーザンさんのなやみ」(Eテレ 前 9:30～9:40)を視聴した。捨てられた犬や猫を保護して、里親探しの活動をする主人公の、命を大切にしない人がなぜいるのか、という悩みのタネを小学校で話し合う企画も盛り込んで展開する道徳ドキュメンタリーで、子どもと一緒に見て、ともに考えて親子の会話の材料にしたいと思った。ホームページでは、他の放送回の映像や関連するテキストを見ることができてありがたい。

○　１月４日(木)の栗山英樹 ザ・トップインタビュー「ファーストリテイリング会長兼社長 柳井正」(BS 後 10:40～11:29)を視聴した。スポーツ界と経済界という異なる場所で、世界一を目指して闘っているトップどうしのやり取りはことばが研ぎ澄まされ、一つ一つの言葉を書き留めたくなった。対談を映像で伝えることで、ふたりの表情やリアクション、高揚感、共感してシナジー効果が生まれている様子が生き生きと伝わり、引き込まれた。インタビュアーの栗山英樹さんの緊張しながらも飾り気がなく人間味のある進行が好印象であったし、柳井正さんの経営者としてのシビアな側面や、リーダーを育て続ける教育者としての側面が印象に残った。ビジネスパーソン向けの番組と思われるが、すべての大人にとっても生き方を考えさせる内容だった。栗山英樹さんだから成り立つ新しい番組だと思うので、進化する姿を見ていくのが楽しみだ。

○　１月１日(月)に発災した能登半島地震の緊急報道ではアナウンサーの鬼気迫る避難

の呼びかけが印象的だった。東日本大震災当時に宮城県の沿岸部に住んでいた家族とともにテレビの情報をずっと見ていたが、その家族が、東日本大震災でもあのような呼びかけがあったら、きっと助かった命がたくさんあっただろうと漏らし、印象に残った。災害時には報道の方法が非常に重要だと今回あらためて感じた。どうしたら緊急性が伝わるかの研究を、ぜひ今後も進めて欲しい。

○　能登半島地震に際しては、命を守るという視点で多角的に情報を届けていると感じる。東日本大震災を経験した東北とも連携しながら情報発信を続けてほしい。１月１２日の「能登半島地震 被災地からの声」(総合 後 7:30～8:40 中部ブロック)では、活字だけでは伝わらない被災地の衝撃的な状態をテレビ番組だからこそ伝えられる内容だった。被災した一人一人の声を踏まえて災害の深刻さに触れることができた。避難所生活一つをとっても多種多様な困難があり、視聴者の側は何ができるのかという視点で番組が作られていると感じた。

○　軽いフラッシュバックを感じながら、毎日能登半島地震に関するニュースを見ている。避難所の様子や子どもたちの集団避難を見ると、卒業式ができるか、友達と離ればなれにならないか、地震について友達や大人と話し合えるのか、心に傷を負っていないかと思いが巡る。東日本大震災の被災地では、発災からの１３年間、さまざまな気持ちを押し殺して、わだかまりを抱えながら大人にならざるを得なかった子どもがたくさんいる。そして大人はそのことに非常にもどかしい思いを持っている。そういった、東北の人たちがこれまで経験してきた思いを能登の人にも伝えたいし、思いが交わるような場を放送の力で作って欲しいと強く願う。

○　１月１８日(木)の列島ニュースでは、福岡局のニュースで、能登半島地震でボランティアの受け入れが徐々に始まっている情報が発信され、福岡での取り組みが紹介されていた。東日本大震災を経験した東北の人は、能登の支援をしたいと思っている人も多い。東北の人の思いを大切にしてもらい、ボランティアや義援金など具体的な支援の方法について広く周知する場があるとよいのではないか。それは、東日本大震災を風化させないことにもつながると思う。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０２３年１２月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

１２月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１４日(木)、ＮＨＫ仙台放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、５月１５日（月）に放送した「ニュースウオッチ９」報道へのＢＰＯ意見について報告があり、議事に入った。

会議では、まず、発見！あおもり深世界「“十和田古道”をゆく」も含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	松沢　卓生（株式会社松沢漆工房　代表取締役）
副委員長	佐々木　裕司（東北電力株式会社　常務執行役員）
委　員	丑田　香澄（一般社団法人ドゥーラ協会　理事）
	昆野　勝栄（河北新報社　論説委員会論説委員）
	佐藤　多恵（シンガーソングライター）
	武田　靖子（株式会社ジョイン　専務取締役）
	永井　温子（株式会社Ridun　代表取締役）
	前川　直哉（福島大学教育推進機構高等教育企画室　准教授）
	中嶋　嘉津子（一般社団法人仙台市障害者スポーツ協会　理事）
	渡邊　享子（株式会社巻組　代表取締役）

（主な発言）

＜発見！あおもり深世界「“十和田古道”をゆく」について＞

（ＮＨＫ側）「発見！あおもり深世界」は青森県域向けの放送で、今年で６年目となる。司会にタレントの元りんご娘・ジョナゴールドさんと王林さんに交互に出ていただき、視聴者目線で、地域の課題や地元の人も知らない文化的な魅力を深く掘り下げる番組になるよう制作している。今回のテーマである十和田湖は、東北の人にはなじみのある観光地だが、実は人々の記憶から忘れられた、いにしえの道があったことを伝えたかった。

○　歴史的な背景を解説や映像で掘り下げる部分と、クイズなど笑顔になれる掛け合いのバランスがよく、見ているうちに自然と知識を得られる構成が好ましいと感じた。十和田古道と熊野古道の関わりや結びつきについてはよく伝わったが、熊野古道そのものがいかに特徴的で、それゆえ世界遺産になったのか、という点も要素として入っていると、十和田古道の魅力がより伝わったのではないか。また、歴史の奥深さを伝えるだけではなく、古道を歩くことそのものの楽しさがもう少し盛り込まれていると、訪れたいという好奇心をより一層かきたてることができたと思う。十和田古道が通る土地で風力発電の計画が持ち上がっていて、歴史を知れば意見も変わるという意見も、押しつけがましくなく伝えた。十和田古道研究メンバーの案内人のコメントからは熱い思いが伝わってきて、魅力が伝わる人選だった。秋田でも放送して欲しいと思えるすてきな番組だ。

○　山歩きを楽しみたい人にも、歴史や紀行を楽しみたい人にもよいバランスで新しさを感じた。山を題材にした番組は、標高が一番高いところがクライマックスになる印象があるが、今回の番組では、最後に十和田湖のボートから見渡すという構成がおもしろいと思った。冒頭の修験や岩木山の映像が印象的だったが故に、番組で取り上げられた実際の自然景観やまだ整備されていない十和田古道には、地味な印象を持ってしまった。出演者の元りんご娘のジョナゴールドさんは、津軽弁で話す様子やワイプでのリアクション、視聴者目線のコメントがとてもよかった。十和田古道研究メンバーの案内人は伝え方が上手で、十和田湖に対する思いが伝わってきた。タイトル「深世界」の「深」という字が似つかわしい、興味深い内容だった。

○　番組を通じて初めて知ることばかりで見入った。学術的な解説をした弘前大学の名誉教授や十和田古道研究メンバーの案内人の語りが楽しそうで、思わず興味をそそられた。熊野古道とつながりがあることには驚きがあり、地域振興に活用するなど可能性を感じた人も多かったのではないか。出演者の元りんご娘のジョナゴールドさんは、番組を明るい雰囲気にしてくれるうえに、津軽弁が自然で、放送によって津軽弁が県内に届くことはとてもよいことだと感じる。３０分があっという間に感じ、青森の文化の幅広さや多様さを県内外に伝えられるすばらしい番組だった。十和田古道の研究が進んで新しい発見があった際には、例えば秋田放送局とともに磨きを掛けた番組を制作するなど、今後の展開を期待したい。

○　名前はよく知られているものでも、歴史を掘り下げると奥深さを味わえるという企画の意図を感じた。地元の良さを紹介する際に、地元以外のタレントが探訪して視聴者に伝えるという番組の作り方はよくあるが、今回の番組は、出演者がすべて地元の

人であり、その人たちも知らないことがらを通して地元の良さを再認識する作り方で、地域放送局ならではの番組だった。十和田古道と熊野古道のつながりについては驚いたが、熊野の形を導入しながら地元に根付いている信仰も受け継いでいることに地元の矜持を感じた。すでに景勝地として評価されている十和田湖や奥入瀬渓流が近隣にあるので、十和田古道の山岳信仰や歴史的な遺産が調和すれば、すばらしい観光資源になると思う。放送を通じて国内外にその魅力を発信して欲しい。

○　複数回視聴しないと内容を理解することが難しい番組だった。歴史や文化遺産にあまり詳しくない視聴者もいる。番組では十和田古道と熊野古道のつながりに重きを置いていたが、熊野古道についての基礎知識が無い視聴者には、そのつながりの意味や価値が伝わらないのでは、と感じた。ただ、番組の中では、十和田神社を中心に、神の世界と人間の世界の境目として滝や鳥居を結界に見立てていたことや、かぎ型の木を大木の枝に掛けることで旅の安全を願っていたことなど、予備知識がない視聴者の理解を助ける工夫も感じられた。十和田古道が使われた当時の人が見た景色が今も変わらず残っていることに視聴者が心躍らせたりロマンを感じたりして、訪れてみたいと思うきっかけになる番組だったのではないか。

（ＮＨＫ側）十和田古道は弘前大学の名誉教授が発見したと発表してからまだ２年しかたっておらず、すべてのルートが判明しているわけではない。研究の途上であり、今回はロマンを味わってもらいたかった。青森県域向けの番組であるため、身近な十和田湖の知られざる魅力を伝える方向性で制作したが、十和田湖が身近ではない人には少し説明が足りない部分があったり、全体の尺の関係で、熊野古道の話を最小限に収めたりしてしまった。今回の意見を今後の番組制作に生かしたい。

○　十和田湖が信仰の対象だったことは新鮮な驚きだったが、十和田古道が使われた時代にどのような人の営みがあったのかが、あまり伝わってこなかった。古道の時代をしのぶ旅であるならば、鳥居や石の灯籠といった物理的な痕跡だけでなく、お祭りや芸能など文化的に受け継がれているものがないのか気になった。祈ったり占ったりしないではいられない人の心のありようは、時代を経ても変わらないものだと思うので、古道の時代の人々とつながるよすがが、人々の暮らしや息づく文化に残っていれば、続編で見てみたい。また、山岳信仰は東北各地にあるが、世界的に珍しい山岳信仰や修験という文化が、インバウンドなどを通してブームになれば注目を浴びるのではないかと期待できる内容だった。

○　冒頭の、青森各地の霊山の映像から番組に引き込まれた。熊野古道と十和田古道の構造がよく似ているという話は興味深かった。また、弘前大学の名誉教授や十和田古道研究メンバーの案内人のコメントが非常にわかりやすく親しみやすかった。８０年前に十和田古道を歩いたという地元女性のインタビューからは、信仰を守ってきたことが伝わってきたとともに、戦時中に日本の勝利を祈ったというエピソードからは、若者が本当に十和田でそうした祈りを捧げたことに胸を打たれた。番組最後に紹介した祈りや占いの場でおより紙を水につけるという習俗は、若い世代の興味も引くのではないか。忘れられてしまったいにしえの道があることがよく伝わってきたので、続編を期待したい。

○　テーマは興味深かったが、教養とバラエティー要素のバランスに苦労して、結果的に前提となる知識の説明や掘り下げが不足しているという印象を持った。熊野古道との共通点が説明されていたものの、その意味や、なぜ十和田古道は廃れたのか知りたかった。８０年前に十和田古道を歩いたという地元女性へのインタビューはもう少し分量を厚く聞きたかったし、当時の資料や当時を知る人の話にもっと焦点をあててもよかったのではないか。冒頭のナレーションで視聴者をあおるようにアピールする手法や、スタジオカメラの切り替えが進行と若干ずれていたことなど、細かい部分に違和感が残ってしまった。バラエティー要素を取り入れ、視聴者を飽きさせない工夫をすることは大切だと思うが、歴史のおもしろさを伝えることに注力して、落ち着いたトーンで見たい内容だった。

○　十和田古道の発見を伝えることで、十和田エリアに新たなストーリーが加わり、観光でもまた違った視点で見えてくる可能性を感じた。十和田古道が世界遺産の熊野古道とよく似た構造であることを、熊野古道の写真と比較したり、十和田古道を歩きながら丁寧に説明したりすることで、当時の人がどのように詣でたのか、様子をイメージすることができた。一方で、スタジオの解説は少し分かりづらかった。江戸時代の山岳信仰の話や、振りがなをつけないと分からないことばなど、意味を追えない箇所があり、複数回番組を見てやっと全体を理解できた。集中して見ないと理解が進まない内容だが、音楽がうるさく感じてしまい、番組と合っていなかったのではないか。

○　十和田古道と熊野古道とのつながりや、盛岡藩の保護を受けていたという点について、もっと詳しく知りたいと思った。十和田湖周辺では、観光地としては奥入瀬渓流が有名になって、かつての中心地が閑散としていることを残念に思っていたが、十和田古道は観光面でも期待できると思った。出演した十和田古道研究メンバーの案内人の解説は聞き取りやすく、また、地元の若い人が歴史の解説をしたりガイドをしたり

することは新鮮で、どのような経緯でガイドになったのか興味が湧いた。東北には秘められた歴史や文化がまだ残されているので、積極的に番組作りに生かして欲しい。

（ＮＨＫ側）十和田古道が使われた当時を文化的に残す痕跡は番組としても必要だと思い取材をすすめたが、番組で取り上げた以上の情報は現時点で得られなかった。出演いただいた、８０年前に十和田古道を歩いたという地元女性は、高齢であるため長時間のインタビューができなかったが、貴重な証言者であるので今後も継続的に話を聞きたい。演出面では、教養として伝える面と楽しく見せる面が常にせめぎ合っていて、きっちりとした番組にすると視聴者が離れる実態もあり、バランスを探りながら制作している。元りんご娘のタレント２人の力を借りて、若い世代にも見てもらえるように意識して砕けたパートを入れているが、演出技術はまだ磨いていかなければいけないと思う。番組で取り上げることが、長い目で見て地域振興にどうつながるかを意識して、制作を続けていきたい。

＜５月１５日(月)に放送した「ニュースウオッチ９」報道へのＢＰＯ意見について＞

○　ＮＨＫの調査結果には担当職員と上司の社会問題に対する認識の欠如と記載されているが、社会的な課題に対して、職場で対話したり議論を深めたりする文化や仕組みはこれまでなかったのか。認識の欠如とあるが、すべての人がそもそも正しい認識を持っているとは限らない点が気になった。

（ＮＨＫ側）一つ一つの取材や、原稿を書き、それをデスクがチェックして放送になるという過程が鍛錬の場であるが、今回の事案は、ワクチンの接種後に亡くなったことと新型コロナに感染して亡くなったことの２つの死が社会的に全く違うという認識が欠けていた。今後もひとりひとりが研さんを積むと共に、研修の場を設けて、すべての職員が今回の教訓をわが身のこととしたい。現場の担当者をチェックする立場の職員も、２つの死を混同することはありえないという認識が、確認を不十分にさせた側面もあり、放送に関わるすべての者があらためて社会課題に対する認識を意識していかなければならないと考えている。

○　事実の正確性やチェックは番組を制作する上での基本であると思うが、生成ＡＩが人間の仕事に影響を与えている現在では、極めて重要になっていると感じる。チェックというのは一見地味ながらも大きな責任を伴う仕事だと思うので、制作にかけていたリソースを一部減らしてでも、チェックにより多くの資源を投入するという判断が必要な時代になってきたと感じた。

○　「これは知っていて当然」とか「ジャーナリストとしては常識だ」という無意識の前提をもう一度見直さなければならないと感じた。リスクチェック機能の強化、再発防止の体制づくりなど、一般的なことばで片づけるのではなく、安易な前提に立たないことが正しい報道の基本であるということをあらためて認識した。

＜放送番組一般について＞

○　１１月１７日の東北ココから「クマ襲撃 異常事態 いったい何が？」を視聴した。衝撃的な内容で強く印象に残った。人里に現れる「アーバンベア」の具体的な生態や対策という、視聴者がいま一番知りたい情報を掘り下げて、専門家の解説や自動カメラの映像により多角的に調査して伝えていた。クマに遭遇した場合の対処方法も、一歩進んだ危機意識をもって行動するよう注意喚起があった。２次元コードでも情報を発信し、日常の行動につながる形でありがたく思った。また、背景にある社会課題やそれに対する秋田の取り組み、平時からの対策の重要性も伝わった。いま見たいと思える問題を徹底的に取材して迅速に放送したことに感謝を伝えたい。命を守る防災とも呼べるテーマであり、今後も定期的に取材して、課題先進地として、東北からの発信でほかの地域の参考になる番組を制作し続けて欲しい。

○　１１月１７日の東北ココからを視聴した。現下の社会問題を、時宜を得て取り上げていた。冒頭のテーマの文字の背景にデザインされたらんらんとしたクマの片目や、闊歩するクマの姿や被害者の証言など、異常事態の恐ろしさを伝える演出で、導入部で引きつけられた。クマが人里に出没する理由として、異常気象による餌不足だけでなく、過疎化や休耕地、人口動態など社会的な変化によって、森と人が住む場所の境界があいまいになっていることが根底にあるという解説を聞いて、伝染病にも同じ構図が当てはまると感じ、自然界と人間界の住み分けの持つ意味について考えさせられた。熊の被害は昔からあったが、とりわけ人間に慣れた「アーバンベア」が引き起こす課題は、今後、事態が恒常化する可能性があるとしたら、予備知識と社会の理解を促すことが必要なので、公共メディアとしてこれからも番組を通して現状と課題を伝えて欲しい。

○　１１月３０日の「ニュースこまち」を視聴した。「＃ａｋｉｔａ～紅葉に雪（男鹿・大龍寺)」の映像は、紅葉に雪が降り積もる様子を自然音のみで伝えていて心が洗われる映像だった。僧侶が読経して息が白くなる様や、絶景をただひたすら映し出す映像が日本絵画の様だった。住職の「冷たさも寒さも含めて今を生きているんだ」ということばが添えられ、年の暮れにふさわしい、印象に残る映像だった。

○　１２月２日のやまコレ「スンちゃんの韓国料理店 ～山形・来日３４年目の日々～」を視聴した。山形県内では、舞台となった戸沢村と韓国に文化的なつながりがあることは知られているが、実際に住んでいる人や生活、時代が変わる中でどんな人生を歩んできたのかを知る機会となった。主人公が行政主導の国際結婚で韓国から戸沢村に来て、慣れない日本の生活に苦労してきた過去を丁寧に伝えていた。農村部はこうした外国人に支えられて家族や地域を維持できた反面で、その存在を大事にしてこなかった現実を学んだ。同じく外国から嫁いで来たものの、主人公とは対照的に、人生を振り返ってすべてが中途半端だと悔やんでいる女性が登場し、胸が苦しくなった。主人公がその女性を励ましている様子は、同じような気持ちを抱く視聴者へ励ましのメッセージとなったのではないか。

○　１２月８日の東北ココから「誰にも言えなかった ～孤立する妊婦たち～」を視聴した。仙台で妊娠ＳＯＳという匿名サイトを運営している代表が、メールなどでのアドバイスのみならず、同行支援や子どもが生まれたあとの母ともつながり続けている活動はすばらしいと感じた。番組で紹介される事例は、どれも本人が登場して、自身の思いや体験を語る具体的な内容で、とても貴重であるとともに胸が苦しくなるものも多かった。「誰にも言えなかった」というタイトルには、人とのつながりが薄い「社会関係資本の貧困」を表しているのだろうと感じた。なぜ女性ばかりが番組で紹介されたような状況に追い込まれるのか、深く考えさせられる内容で、こういった番組こそジャーナリズムの仕事だと感じた。地域放送として取り上げられたことで、まさに私たちの街で起きている出来事だと感じさせる力があった。引き続きこうした貴重な番組を作り続けて欲しい。

○　１２月１０日の発見！あおもり深世界「出張！ナノコエ～あなたの小さな疑問に答えます～＃０８」（総合 後 1:05～1:48 青森県域）を視聴した。なぜ青森には三戸、八戸など「戸」がついた地名があるのかというテーマは、二戸、九戸など同様に「戸」がついた地名がある岩手の人にも関心がある内容だった。「四戸」が地名として現在は存在しないことは知っていたが、なぜ無くなってしまったのかという理由や、かつての「四戸」がどの辺りだったのかを初めて知った。八戸市の図書館の学芸員の解説

があり、学術的に調べたところが徹底していると感じた。青森と岩手は文化圏がまたがっているので、今回のような共通するテーマの時は岩手県でも放送があるとよいのではないか。出演しているタレントの王林さんからは青森愛を感じ、アナウンサーとのやり取りもテンポがよくて、とてもわかりやすい内容だった。

○　１１月２２日のあさイチ「愛(め)でたいｎｉｐｐｏｎいきなり んめぇ！晩秋の宮城美味めぐり」を視聴した。宮城が米どころであることは知っていたが、あえて専門店でおにぎりを購入することはこれまでなかった。放送を通して、具材を地元の食材にこだわっていることや、開業するに至ったエピソード、東日本大震災の津波被害から再スタートした話を知り、専門店でおにぎりを買ってみたいと思うきっかけになった。宮城の人でも知らないご当地のグルメ情報が満載で、その地に行ってみたいと思い、楽しく見られた一方で、それら宮城の特色ある料理がほとんどスタジオには実物として登場せず、出演者が食べている様子を見られなかったのは残念だった。

○　１２月６日のクローズアップ現代「世界が注目！日本の教育『ＴＯＫＫＡＴＳＵ』特別活動の意義は？」を視聴した。子どもたちが活発に意見を交わして物事を決めていくという日本式教育法を取り入れる学校がエジプトで増えているという内容を見て、日本では意見が出なかったり周囲に同調したりと形骸化しているのではないかとも思ったものの、日本国内の好事例も紹介されていて安心した。エジプトで「ＴＯＫＫＡＴＳＵ」を実践している先生が、自主的に課題を見つけて解決していく特別活動への期待を語っていたが、当の日本社会は政治参加の意欲が低調であることへの危機感も感じた。番組は、教員の働き方改革やコロナ禍で、特別活動や学校行事が削減されていくことへの警鐘でもあったように思う。学校教育が何を大事にするべきか考えさせられた。

○　１２月８日のアナザーストーリーズ 運命の分岐点「ジョン・レノン そして『イマジン』は名曲になった」を視聴した。「イマジン」が人々の心に残る名曲になったいきさつについて、ジョン・レノンの追悼集会での出来事からひもとくストーリーは、納得感のあるかっこよい説明だった。ＢＢＣのニューヨーク支局の記者が、９．１１の同時多発テロ時にナショナリズムが高まる中で「イマジン」の放送を自粛する動きがあったことを回想する場面があったが、ＢＢＣの記者を取り上げるのであれば、湾岸戦争でのＢＢＣ自身のイマジン放送自粛の対応にも触れて欲しかった。ジョン・レノンが亡くなった１２月や、戦争やテロが起きるたびに、「イマジン」は人の心によみがえってくる。みなひとつ空の下にいるというメッセージは心を打ち、戦争や紛争が起きている地ではどのように聞かれているのかと思いをはせさせられるよい番組だった。

○　１２月１３日のクローズアップ現代「ゆがんだ“正義”はなぜ　～私人逮捕系動画の波紋～」を視聴した。逮捕された投稿者の逮捕前の証言や複数の動画配信者、被害を受けた個人、自治体など、様々な関係者から率直な意見や心理状況がしっかりと語られていて、取材が厚い内容だと感じた。動画配信サービスやプラットフォーム企業の具体名を出した踏み込んだ報道で、社会課題の警鐘を鳴らしていて、非常に強く印象に残った。社会現象を扱う際に、その具体的な被害に踏み込んで伝えられることがテレビやマスメディアの存在価値であるので、放送倫理に注意しつつも、問題を掘り下げた報道をこれからも続けて欲しい。

○　１１月２９日のグレーテルのかまど「弘前で！アップルパイ」を視聴した。リンゴと青森の歴史をどのように描くのか気になって見ていたが、地元の人にとっては新しい情報が少なかったと感じ、残念だった。果肉が赤いリンゴが映像で紹介されていたものの、品種の名前が出てこなかった点が気になった。実際に調理する場面では一般的な品種を使っており、弘前を舞台にした番組だったので、青森の品種を使って欲しかった。また、番組を通して生産者の顔が出てこなかった点も残念で、日本の一大産地である青森の生産者の声を紹介して欲しかった。

○　１２月８日のあしたも晴れ！人生レシピ「左手が奏でる喜びの旋律 ピアニスト 舘野泉（８７）」を視聴した。右半身に障害がある不自由な暮らしでも１人暮らしをして家事をこなす様子からは、人生レシピというタイトルどおり、生きるヒントが詰まっていた。脳出血で半身が不自由になったことや、コロナ禍、妻を亡くしたことなど数々の苦難を、新たに音楽と向き合うことで乗り越えてきたことが伝わってきた。私はピアノを習うことはなかったが、主人公が左手のみでピアノを演奏する様子を見て、誰しもこのような可能性は秘められているかもしれない、と生きる上でのヒントをもらったように感じた。俳優・賀来千香子さんのコメントの出し方やタイミングがよく、番組にすがすがしい印象を与えていてよかった。

○　１２月９日のヴィランの言い分「ダニ」を視聴した。俳優がダニの着ぐるみを着て演じている明るい雰囲気の番組だった。出演者どうしの掛け合いがコミカルで、全体として楽しく見ることができた。一般的にはよいイメージのないダニに対して、番組の進行をへるごとに、気持ちがプラスにもマイナスにも揺さぶられ、教育番組として多様な見方が自然に身につく番組構成がすばらしいと感じた。専門家にダニの模型をかぶせたり、動画配信サービスでよく見る動画風の解説動画が挟まれたりと、視聴者を飽きさせない作りになっており、幅広い世代で見ても盛り上がるおもしろい番組だった。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０２３年１１月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

１１月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１６日(木)、ＮＨＫ仙台放送局において、１０人の委員が出席して開かれた。

議事に先立ち、令和５年地上基幹放送局の再免許にあたっての総務大臣の要請の紹介があり、議事に入った。

会議では、まず、東北ココから「絹江さんと春江さん 浪江町津島をあきらめない」も含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１２月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	松沢　卓生（株式会社松沢漆工房　代表取締役）
副委員長	佐々木　裕司（東北電力株式会社　常務執行役員）
委　員	丑田　香澄（一般社団法人ドゥーラ協会　理事）
	昆野　勝栄（河北新報社　論説委員会論説委員）
	佐藤　多恵（シンガーソングライター）
	武田　靖子（株式会社ジョイン　専務取締役）
	永井　温子（株式会社Ridun　代表取締役）
	前川　直哉（福島大学教育推進機構高等教育企画室　准教授）
	中嶋　嘉津子（一般社団法人仙台市障害者スポーツ協会　理事）
	渡邊　享子（株式会社巻組　代表取締役）

（主な発言）

＜東北ココから「絹江さんと春江さん　浪江町津島をあきらめない」について＞

（ＮＨＫ側）

福島県浪江町にかつて1,400人ほどが暮らした津島という地区があり、原発事故のあと全域が帰還困難区域となったが、ことし３月末に地区の一部に復興拠点ができ１２年ぶりに人が住める様になるという節目を迎えたことを踏まえ、半年かけて制作した。番組のタイトルにあるように、石井絹江さんという避難指示解除後に津島に戻って生活を始めた人と、三瓶春江さんという津島の自宅を解体する決断をした人の２人に注目して、

大きな節目を迎えた津島地区のこれまでとこれからを考える番組にしたいという思いで制作した。

○　生まれ育った土地に突如住めなくなってからの１２年をどういった思いを抱え、悩んで向き合って過ごしているかという様子を丁寧に伝えていた。２人に焦点を絞った番組構成やナレーションによって、主人公となる２人の気持ちが際立って伝わってきた。「あきらめない」というタイトルや「ふるさとへの思いを胸に今を生きる、津島の人々です」という締めのことばがとても響いて、切々と視聴者に届くような番組だった。どんなに技術や時代が進んでも残り続けるであろう、地域に根ざした人間の営みや気持ちを丁寧に見つめていく番組作りを今後も続けてもらいたい。

○　被災地の現状を伝える番組は、３月１１日付近には多くあるが、今回は避難指示解除を節目と捉えて３月ではない時期に放送したということが、非常に大事なことだと思う。そこに住む人以外には見えない節目を伝えることは、東北でしかできない取り組みだと感じる。今回出演の２人のような地域に住む人がコメントし続けてくれることも貴重だと思うので、持続的に伝えて欲しいし、今後は若い世代にも焦点を当てて欲しい。自身も被災地に住んでいるが、震災をはじめ災害報道では、起こったことの問題は注目されるが、どういうことが問題になり得るのかといった事前の報道は少ないと感じる。これから起こりそうなことやハザードになりそうなことをフラットに伝える情報発信がたくさんあるとよいと感じている。

○　ジャングルのように変わった田畑の映像が１２年間止まった年月を表現していた。単身で戻ってきた絹江さんと、断腸の思いで家の解体を決意した春江さん、２人の心の内のことばをうまく引き出して交差させながら、取り巻く人々の心情や行動も織り交ぜて、故郷を奪われた人々の無念と葛藤、強さをうまく描いた番組だった。伝統芸能「津島の田植踊」を若者に教えることで故郷のあかしを未来へつなぐ活動にはふるさと再生への希望を感じた一方、絹江さんの夫のように必ずしも強い人ばかりではないそれぞれの人のありようもうまく描き出していた。春江さんが家の解体を家主の義母ミサ子さんに告げた際に、ミサ子さんが無念な表情で「一番大事なものを失ってしまった」と優しく語る場面は、原発事故の残酷さという本質的な一面を端的に言い表していた。

○　津島に戻ってきて活動している絹江さんにスポットがあたりがちだが、春江さんも一緒に取り上げたというところに番組の意義があった。番組前半での「帰らないイコール津島をあきらめたわけではない」という春江さんのことばが大きな意味を持つと思う。あきらめないというか、もう考えたくもないというか、原発事故が無ければ

まったく経験しなくてよい苦悩を皆さんが経験しているということの片鱗を伝える番組だった。１２年以上の時間がたち事情が複雑に入り組んでいるなかで伝承はどんどん難しくなっている。けれど、難しいから、面倒くさいからといって福島のことを考えることをあきらめてはならず、ＮＨＫには伝え続けて欲しい。

○　絹江さん、春江さんともに一つ一つのことばが響いて、１２年を経てもあきらめないという、思いがつきないような年月を過ごしてきたのだと感じた。２人の生き方や思いは対比的に描かれたが、２人とも共通して葛藤の中に非常に強い意志を持っていることも伝わってきた。昔の津島の運動会の記録映像からは、かつての津島の結びつきの強さが伝わってきて､離ればなれになったつらさが際立っていた｡138 軒の解体、復興拠点には現在７世帯１２人が居住という数字からは、現実の厳しさをリアルな実態として知ることができた。震災の番組はもういいという人や、あえて悲しい思いをしたくないので見ないという人もいるが、むしろ番組を見て希望をもらったり励まされたりするという前向きな意味合いもあることを多くの人が知って、このような番組を見てもらいたい。

（ＮＨＫ側）

番組制作にあたって一番大切にしたことは、主人公の２人が言いたいことに耳を傾け、それを冷静に伝えるということだ。タイトルの２人の女性を軸に描いてはいるが、それぞれの夫も重要な要素だった。絹江さんの夫、隆広さんは、酪農を営んでいたものの原発事故で殺処分をしたことで心の傷を負いメディアへの出演をしていなかったが、５年ほどかけてカメラの前に出てきてもらえる状況になり、いま元気に津島に戻れる人だけではないことを描きたかった。春江さんの夫、章陸さんは、村の記録係として３０年にわたる膨大な映像アーカイブを持っていて、その映像を活用することでかつての津島がどれほど人のつながりが強い場所だったかということを肌感覚ででも伝えたかった。

○　絹江さんと春江さんの背景は異なるものの、津島を愛しているということが伝わってきた。春江さんの夫が撮りためた映像を見て津島の良さが伝わってきたからこそ、ことばでは言い尽くせない無念さを感じた一方で、人間の生きる底力というものをこの番組を通して改めて考えさせられた。自分たちの役割として、震災を風化させないために伝承していくことの大切さを改めて考えた。２人を主人公にする中でも、多くの人が家屋を解体するかどうかの決断を迫られている道中がもう少し描いてあると、

ミサ子さんの「あの家ももったいない」ということばに込められた思いがより伝わってきたのではないか。７世帯１２人が今後どんな風に生きていくのか、２人の生き方を通して興味深く感じた。

○　絹江さんと春江さんが対照的に見えるのは、原発事故があったが故であり、かつての運動会の映像を見るにつけ、事故さえなければ津島で同じように暮らしていた２人の女性であったと思われ、かくも生き方の違いが際立って対照させられてしまうことに切なくなった。被災地ではいま、復興に関する制度があたかも所与の前提であるかのように処理されていくことが風化を加速させている一面があると思っている。被災した人たちは復興の枠組みやスケジュールを押しつけられ、振り回されながら生きている現状があり、その理不尽な前提をもっと丁寧に伝えられないか、と思っている。今回の番組は、運動会の映像や家の柱に刻まれた孫の背丈によって、事故がなければあり得たであろうものの価値がしっかりと伝わった。時間の経過で埋没させられてしまうことを批判ではなく、想像によってかきたててくれたことはとてもよかった。

○　冒頭、絹江さんの「地図からなくなってしまう」という切実なせりふに胸を締め付けられ、春江さんの「帰らないイコール津島をあきらめたわけではない」ということばから決断の重さが伝わってきた。２人を通じて、同様の境遇にある多くの人の被災した土地との関わり方のグラデーションを感じられ、どのように関わっていくのか、それぞれの選択をどう捉えるべきか、それをどう伝えるかという難しさを感じたと同時に、何をもって復興というのかはっきりさせられない難しさも番組を通じて改めて実感した。柱に刻まれた孫の身長の記録や動物に荒らされた様子の映像からは、ビジュアルとしても時間の経過や心境の複雑さが伝わってきた。春江さんが家を解体する決断をした場面がつらく、本来であれば考えなくてもよかったことに向き合わなければならないという現実が存在し続けているということが伝わって、とても意義のある番組だった。

○　「すげー、林になってる。」という番組冒頭のリアルなリアクションから１２年たった現状がひしひしと伝わってきた。絹江さんの「何かをやらなければ本当に地図からなくなってしまう」というとのことばに地元の気持ちが詰まっており、希望を捨てずにエゴマ栽培をする姿は輝いて見えた。対照的に、春江さんは家の解体を決意するなかでも津島をあきらめないと繰り返し語り、大家族そろって食卓を囲むことで小さな津島を作るんだという信念が伝わった。春江さんの自宅で散乱している食器や家具は、すぐに戻れると思っていた人もたくさんいたことを物語っていて、１２年の歳月だけが過ぎて、根本の解決には向かっていない気がした。形は違えどもあきらめない２人の前向きな気持ちが感じ取れる番組だった。

○　震災についての福島の実情は、東北でさえもこうした番組がなければ詳しく知る機会が限られ、全国規模では３.１１の近辺でしか紹介されない現実がある。しかし、まだまだ区切りをつけたいけれどもつけられない葛藤があるという福島の実態を全国的にもっと多くの人に知って欲しいと感じた。絹江さんがエゴマを懸命に育てている様子はあきらめない不屈の精神を感じ、エゴマの実を放射線量測定器にかける様子には原発事故への憤りを感じた。他方で夫の隆広さんが体力も気力もなくしてしまっている様子が切なく、奮闘している絹江さんを国民全体で支えるという気持ちが大事だと感じた。春江さんからは、思い出の家を解体するかどうか、補助金の期限もあって、つらい選択を迫られている葛藤が伝わってきた。夫の章陸さんが持つ映像記録によって、過去の何気ない日常風景と現在の姿が対比になっていて、貴重な映像をうまく生かしていた。

（ＮＨＫ側）

今回は、絹江さんの前向きさとちらりと見せる輝く笑顔を推進力に、今ある厳しい現実を、日常生活の中で淡々と伝えて、よい読後感をもたらせるのではないかと意図した。今回の番組に絹江さんと春江さんが一緒にいるシーンはない。取材期間中のイベントで２人が一緒にいる機会があったが、かつて 1,400 人いた場所に今は１２人しかいないという現状を伝える上では、一瞬のにぎわいを写すことが本当によいのか、と考え、そのシーンは使用せず、長期の取材をした強みを生かして淡々と津島の現状を伝えた。２人の仲が悪いという印象にみえないか、危惧しながら編集をした。原発事故や震災のことは悲しい気持ちになるからもう見たくないという視聴者の気持ちがあることは認識しており、今回のような番組が制作しづらくなっている現状があると感じている。しかし伝え手としては、さまざまな形で、いま現地で何が起きているかを伝えていきたい。今後もこの２人を継続取材することで、春江さんの家が解体される瞬間や、それを自分のカメラで記録する夫の章陸さんの様子など、今回伝えきれなかったじくじたる思いを届けたい。

＜放送番組一般について＞

○　１１月４日(木)の被災地からの声 つぎの一歩「福島県楢葉町」を視聴した。サケが戻ってこない木戸川の状況や避難指示解除後すぐに帰還した障害者作業所の人、地域

の伝統芸能を継承する高校生と、この番組らしく多角的に地域を取材している構成になっていた。特に、１１年前、８年前に「被災地からの声つぎの一歩」に出演した人が再び出たシーンでは、当時は避難中だったのがいまは楢葉町に戻ってきた笑顔の姿が印象的だった。ただその分、この番組が戻っていない人や戻れない人を苦しめているのではないかという番組制作の難しさも感じざるを得ない。戻っても戻らなくても「なんで」と聞かれてしまう難しさや悩ましさが福島の市町村にはある。福島の原発事故では最大時１６万人が県内外に避難して、１６万人分の涙や悩み、葛藤があるなかで、地域に絞ってカメラを回すと、どうしても戻ってきた人が中心になってしまう。戻った人だけでなく、避難して戻れなかった人にも思いを至らせるような番組になればよりよいと感じた。

○　１１月１０日(金)の東北ココから「限界集落住んでみた～宮城・栗原程野編～」を視聴した。ディレクターとはいえ、若者が限界集落に住んだ正直な感想を見ていくのは楽しく、若者が田舎に行くこと自体が活力になると感じた。一方で、限界集落だからこそできるような先端的な取り組みを行っている事例も各地であるなかで、番組の発信のしかたが、おじいちゃんとおばあちゃんの日常が中心に感じられてしまったので、もったいないと感じた。郵便局員が出勤前にイノシシをしとめるシーンの「命と向き合う 出勤前」というコメントはキャッチーではあったが、狩猟、農業、神楽とこの地域固有の話ではなく、せっかく地域にフォーカスするのであれば、特徴的でとがった内容のほうが、地域の良さを発信するためにもよいのではないか。

○　１１月１０日(金)の東北ココからを視聴した。見守り役のタレント・狩野英孝さんはほどよいリアクションのコメントで、最後に感想をしっかり述べている様子は好印象だった。台本のない日々の中で突然起きるリアルな出来事が魅力で、笑顔が絶えないシーンが多く、日常の場面や番組最後のドローンでの空中撮影からは、住んでいるところへの誇らしさが伝わってきた。伝統芸能を踊ってくれた人がいたが、すばらしい芸能を番組で取り上げることで、たとえ継承する人がいなかったとしても、誰かしらの心には残ると感じた。番組が始まったころは、テントを張って生活し、近所の人の井戸を借りて顔を洗うような準備のなさが味を出していたが、最近はディレクターが空き家や公民館を事前に借りるというような準備がうかがえるので、はじめのころのような空気感が欲しいとも感じた。

○　１１月１０日(金)のきんよる秋田「生誕１００年！ハチが好きすぎて♡ 」を視聴した。秋田県民にとってハチ公はなじみ深いが、それでも改めて愛着が湧き、「秋田の誇るべきハチ」という気持ちが醸成される番組だった。地域おこし協力隊が大館と渋谷を行き来しながら 100 周年のムーブメントをけん引していることは番組を通じて

初めて知り、わくわくしながら理解を深めることができた。海外にもファンがいて、秋田県に来たのに全然会えないという声をよく聞くので、どうすればハチ公への思いを秋田県民のムーブメントとして高め、県外・海外にＰＲできるのか、具体的な点についても今後ＮＨＫと一緒に考えていきたいと思った。

○　１０月２１日(土)のＮＨＫスペシャル「超・人手不足時代 ～危機を乗り越えるには～」を視聴した。人口減少や少子高齢化による人手不足は確実に進行している目前にある課題だが、危機感に乏しく、問題を先送りしている現状がある。番組では、待ったなしの現状に対しての警鐘と助言を、裏付けも含めて行っていると感じた。エッセンシャルワーカーが不足する未来を、データに加えて、全国各地の幅広い業種の実態を丁寧に取材して伝えていた。一方で、ＡＩなどの導入で、ホワイトカラーは人余りになるが、終身雇用が前提で、業種間の労働移動が容易な雇用関係になっていないという日本特有の課題も的確に指摘していた。生産性を上げるという解決策の提示でも、ロボットやＩＴを活用することで宿泊代金を上げても客足に影響しなかった旅館の事例や、電柱を一般の人々がゲーム感覚で撮影して故障箇所を探知することで保守作業の効率化を図った事例など実例が豊富で興味深かった。学び直しの支援を提供する社会であるべきだという提言はもっともだが、一般論だけではなく、ＮＨＫには学びの大切さを伝えたり、ポジティブな動機づけしたりする番組を提供して欲しい。

○　１１月５日(日)のＮＨＫスペシャル「調査報道・新世紀　Ｆｉｌｅ１　中国“経済失速”の真実」を視聴した。中国の経済失速の現状や賃金未払いへのデモ、経済統計が正確に発表されないなどのよくある話のなかにも、思いもよらぬ話が挟まれていて感心した。デジタル技術や最新のテクノロジーを使って、普通の取材ではつかめないような実態をあぶり出す手法はぜひ確立して欲しい。他のメディアや研究機関などと連携することでスケールが大きくなったり、精緻な分析が可能になったりすることもあるので期待したい。地方のメディアと協力することで隠れている問題を浮き彫りにするなど様々なことに挑戦してもらいたい。

○　１０月２３日(月)のプロフェッショナル仕事の流儀「エレン・イェーガー スペシャル」(総合 後 11:45～24 日(火)前 0:05) を視聴した。架空の人物でも「プロフェッショナル仕事の流儀」という番組が成立することに驚いた。漫画やアニメに出てこないセリフも多く、独占インタビューという仕立てが楽しかった。インタビューのタイミングも作品の時間軸での設定が生きていた。生い立ちの回想や身の回りの重要人物への取材など、おもしろさを感じる中にも、自由を阻む象徴である「壁」や「巨人」、登場人物の信念が描かれていて見応えがあった。作中でも特徴のあるシュールでコミカルなシーンも入れ込まれていて、おもしろかった。ほかのアニメの作品でもぜひ見て

みたい。

○　１１月３日(金)の病院ラジオ「国立国際医療研究センター病院編」（総合　前 8:15～9:14）を視聴した。初めて視聴したがどんどん引き込まれた。テレビなのになぜラジオと銘打っているのだろうかと思いながら見たが、安直な再現ドラマではなく、当事者が来て境遇や病気と向き合っている現実を語り、サンドウィッチマンが親身に聞きながらも笑いをとってリクエスト曲を流すという構成を見て納得がいった。そのリクエスト曲も、それぞれの人たちが病と闘いながら何を大切にしてきたかということがなんとなく分かるような曲が続いていて、「人ってすごいな、いいな」と感じ入った。

○　１１月３日(金)の病院ラジオを視聴した。不定期に放送されているので毎回楽しみにしている。涙する場面が多いが、サンドウィッチマンさんの人柄のおかげで笑えるところもたくさんある。生きる決意や支える決意が伝わってきて、勇気をもらえる。初めて耳にする病気や、知っているつもりでもよく分からない病気やけがの知識、入院するときの心得なども知ることができる。ナースステーションやフロアでラジオを聞いている医療従事者や患者、ご家族が映されるが、病気やけがを治す、闘うときにはたくさんの人が支えてくれることを改めて感じ、一歩前に背中を押してくれるような好感が持てる番組だ。不定期の放送なので、次回の情報をキャッチするのが難しいが、毎回楽しみにしている。

○　１１月５日(日)の小さな旅「母なる山に抱かれて ～青森県 岩木山麓～」を視聴した。１１月上旬の青森らしい、真っ赤に色づくリンゴのシーンから始まり、とてもよかった。字幕が少なく、視聴者は津軽弁を聞き取れているか心配にはなったが、その分青森の空気感を感じてもらえたのではないか。地元に住んでいても、嶽温泉を支えている人の顔を見たり考え方に触れたりする機会があまりなかったので、新鮮な気持ちで見ることができた。リンゴ農家の紹介では、リンゴ畑を、リンゴを栽培する場所としてだけでなく、家族の絆を強める場所として紹介されていたのが印象に残った。「リンゴ畑は家族の歴史」というセリフは共感でき、青森のリンゴを理解するために重要な要素だと感じた。全体として映像がとてもきれいで、あの岩木山（いわきさん）に会いに行きたいと思わせるすてきな番組だった。

○　１１月５日(日)の小さな旅を視聴した。キノコを扱っている土産物店や嶽温泉のおかみさんなど、それぞれ山の恵みを得て、それを大事に守りながら仕事をしている様子を、山本アナウンサーが控えめにかつ楽しく紹介しているのが、番組の温かい雰囲気の秘けつなのだと感じた。地元の人が、岩木山（いわきさん）が心の支え、よりど

ころという風に言っていて、ふるさとの山のありがたさは、自身の経験からもまさにそのとおりだと思った。岩木山麓（さんろく）に広がるリンゴ畑と岩木山（いわきさん）の紅葉が美しく、価値のある映像だった。リンゴ農家の表情はとても幸せそうで、開墾した先祖への感謝や、リンゴ畑を家や人生の一部と捉えて残していきたいと涙ながらに話す様子が印象に残った。その土地で生きる人の思いには計り知れないものがあり、苦労の反面で掛けがえのない喜びがあるということを改めて感じた。

○　１１月９日(木)のＮＨＫ ＭＵＳＩＣ ＳＰＥＣＩＡＬ「福山雅治～時を超えるギター～」を視聴した。1940 年代の貴重なギターのリペアをしてもらう旅で、その工房を見ることができる機会がないからこそ、職人の技術の高さや 1930 年代から変わらず手作業で 300 の工程を行っているということが驚きだった。自分が作るギターはどれも自分たちよりも長く生きて欲しい、ギターを手にした人がギターよりも長く生き続ける曲を作ることを願っているという職人のことばに胸を打たれた。工房の歴史やギターができあがるまでの背景、福山さんの弾き語りとどれもすばらしかった。音楽をやっている身としてもとても刺激になり、何かを作り出しているに人に刺さる内容だった。

○　１１月１０日(金)のドキュメント７２時間「長野 タカを見上げる峠で」を視聴した。淡々と人々にマイクを向けて取材した構成であるのに、なぜこれほど深みのある終わり方ができるのか感心しながら見ており、癒やされる番組だ。ひとりひとりの数分のコメントの中に、その人の生き様がそのままありありと思い浮かぶことばを拾っていて、タカをテーマにしてこんなにも広がりがあるのかと感動した。人間関係に悩んで会社を辞めた人が、群れずに行動するタカにひかれて、自分を投影しているという話は特に印象に残った。２週間泊まりがけで来たり、リタイア後の１年の楽しみに峠を訪れる人がいたりと、孤高な生き方をするタカに、前に向かい続ける尊さを感じて励まされている人がこれほどたくさんいるということを知ることができた。

○　１１月１３日(月)の市民Ｘ「謎の天才『サトシ・ナカモト』」（総合 後 10:00～10:44）を視聴した。今世紀最大級の技術革新とか、ノーベル賞級の発明と評されるデジタル通貨のビットコインを生み出したサトシ・ナカモトが素性を明らかにしないまま消えてしまったという謎に、わかりやすく、かつ魅力的に迫った番組だった。日本と海外の研究者、専門家へのインタビューと、それを補足するＣＧだけでほぼ構成されていながら、ブロックチェーンとは何かという難しい前提もわかりやすく説明していた。登場する人がサトシ・ナカモトへの尊敬や憧れ、仲間意識を持っていることによって、人物像が浮かび上がってくるという構成にわくわくした。洗練されたＣＧと音楽で、よい意味でＮＨＫらしさがない海外の番組のような雰囲気が保たれていて、若い人に

も見てもらえる番組ではないか。

○　１１月１０日(金)の地球は放置してても育たない「争いはなぜ起きる？」（Ｅテレ 後4:45～5:00）を視聴した。どうしたら子どもたちにＳＤＧｓに関心を持ってもらえるかというテーマのもと、地球を育てる育成シミュレーションゲームの形で社会問題を伝える構成が斬新で、難しい内容だからと子どもたちがチャンネルを変えることなく見て欲しいという意欲を感じた。内容も子どもだましではなく、ウクライナの小学生のリアルな声を伝え、視聴する子どもたちも心情を重ね合わせて考えられるような工夫が感じられた。ただ、よりわがこととして理解を深めてもらうには、たとえばクラスや友達とかで起きるようなレベルまで落とし込んで、争うこと自体は身近で起こりえることや、自分たちに何ができるかも感じたり考えたりさせることができると、発展版としてよいのではないかと感じた。今後も、世の中の多方面の課題を伝え、子どもたち自身がどう関われるのか考えさせられるような番組を期待したい。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０２３年１０月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

１０月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１９日(木)、ＮＨＫ仙台放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、東北ココから「魅惑の東北キャンプ道 みちキャン」も含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１１月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	松沢　卓生（株式会社松沢漆工房　代表取締役）
副委員長	佐々木　裕司（東北電力株式会社　常務執行役員）
委　員	丑田　香澄（一般社団法人ドゥーラ協会　理事）
	昆野　勝栄（河北新報社　論説委員会論説委員）
	佐藤　多恵（シンガーソングライター）
	武田　靖子（株式会社ジョイン　専務取締役）
	永井　温子（株式会社 Ridun　代表取締役）
	中嶋　嘉津子（一般社団法人仙台市障害者スポーツ協会　理事）
	渡邊　享子（株式会社巻組　代表取締役）

（主な発言）

＜東北ココから「魅惑の東北キャンプ道　みちキャン」について＞

（ＮＨＫ側）

今回の番組は、東北の魅力を再発見したいという発意から内容を考え始めた。東北地方向けの放送ではあったが、ＳＮＳでの発信を強化し、出演者やナレーションを担当した声優の、全国のファンに訴求した。ＮＨＫプラスで見てもらい、それにより東北のキャンプ場に来てもらえるきっかけを作りたいという思いで取材・制作を行った。構成としては福島県をベースにしつつも、可能なかぎり東北全県の魅力を、季節を問わず出すために資料映像を活用した。

○　子どものころはよくキャンプをしていたが、最近のキャンプ場は設備がとてもきれ

いだと驚かされた。東北にも充実したキャンプ場があると知ることができたし、キャンプは東北を五感で味わうのに本当に有効なコンテンツだと感じた。東北の魅力を再発見するという意図にはまっており、キャンプのビギナーだけではなく、私のような最近キャンプをやっていない人にも響く内容だった。

○　放送時期は秋の行楽シーズンに向けてタイミングがよかった。コロナ禍以降、キャンプをする人が増えていて、キャンプの形も多様化してきたと感じているが、いつかはやりたい、そのきっかけを探している層にも、キャンプの魅力は幅広いということが伝わったのではないか。東北に 460 か所を超えるキャンプ場があり、その土地ならではの食材を使ったキャンプ飯といった新たな魅力・情報があることは、気軽に東北中に出かけるきっかけとなり行ってみたいと心が動かされると感じた。出演者のタレント・髙地優吾さんのキャラクターがフレッシュで、飾らない雰囲気がよかった。アイドルであっても、仕事を忘れられる時間が貴重だという等身大のコメントに共感でき、好感が持てた。ただ、トイレなどの水回りがきれいなことがよいことであるように取り上げられていたことは気になった。人為的に整えられていないことが自然の魅力でもあると思う。また、番組の終わり方があっさりしていたため、もう少し印象に残る工夫があってもよかったと感じた。

○　東北６県の特徴あるキャンプ場を紹介した企画で、東北ワンチームで発信したいというまとまりの良さを感じた。東北在住の人間は、東北が都会と自然が近接していてどちらも楽しめる環境であり、雄大な自然、豊かな食、四季などが魅力であることを意識したことがなく、その良さが東北以外のキャンプファンには届いていないかもしれないと改めて思った。まずは東北に住む人がキャンプ場に行き、にぎわいを作ったり交流したりして、その魅力を発信することが必要で、視聴者はその魅力をどう表現して発信できるか、また魅力をさらに高めるアイデアはあるのかといった相乗効果を感じさせる内容だった。キャンプは自然に親しむ中で、豊かな情操や創意工夫、協調性、助け合いなどを学ぶことができるので、キャンプ熱が幅広い年代層に広がって、助け合う豊かな社会づくりの基盤のツールになったらよいと思う。出演者もナレーションも番組にマッチしていたうえ、各地のキャンプ場を知ることができ、非常に楽しめた。

○　東北にこれほど多彩なキャンプ場があると初めて知った。実際にＳＮＳ等で東北に行きたくなったという声を目にし、視聴者に東北でのキャンプの魅力が伝わる番組だったと感じた。聞き取りやすいナレーション、視聴動機につながる出演者、軽快な音楽が相まって、全体としてゆったり視聴でき、楽しさが伝わる番組構成だった。自然の映像、サウナや天然水風呂といった最近の動向、地元野菜での調理など、キャン

プ場の魅力がテンポよく、幅広く届けられていると感じた。福島にとどまらず、秋田の冬キャンプ、青森の地吹雪ツアーなどディープな情報が添えられていた点もよかった。キャンプは、自然の中に人が入っていくよい側面があり、人が自然に入るということは、熊の問題や災害とも密接に関わると言われている。今回は東北ブロックの放送だったが、首都圏をはじめとした幅広い地域の視聴者にも訴求して欲しい。

（ＮＨＫ側）

キャンプをする方にとっては若干もの足りなかったもしれないが、間口を広げることに特化して、初心者向けの情報やトイレなど水回りの情報をあえて盛り込んだ。キャンプを単にレジャーとして捉えるのではなく、キャンプ場へ行くことで自然との関わりが一歩進んで問題解決につながる可能性があるとも感じた。今後も、キャンプ場を社会資源として生かし、自然と人との関わりやコミュニティーづくりにＮＨＫが貢献したいと考えている。

○　東北のキャンプ場それぞれの魅力がよく伝わり、行ってみようという人に訴求した内容だった。道の駅がご当地の食や文化に触れる場所になっているという紹介は価値があったと思う。一方で、今回の内容はキャンプ初心者向けだったので、キャンプに精通したタレントではなく、ファミリーや友人どうしなど視聴者の身近にいそうなグループを起用したほうが適していたのではないか。また、キャンプに求める世の中のニーズとして、ガイドブックにあるような過ごし方とは対極の、「あれをせねば、これをせねば」ということが無い自由気ままな時間の過ごし方というものも強いと感じる。「キャンプ道」というタイトルは、何かしら極めるべき道があるという提示と受け取った。今後も制作するのであれば、どのような方向に東北のキャンプの活動を深めていけるかということをぜひ見せて欲しい。

○　自分は自然豊かな場所に住んでいるので、逆にキャンプに魅力を感じていなかったが、キャンプが進化していることに気付かされた。トイレなどの水回りがきれいだということは、とても重要だと思うので、その情報を取り上げられていたことはよかったし、キャンプはわざわざ不便なことをしに行くという印象が強いので、テントが簡単に組み立てられたり、まきを安全に割れたりと、女性でもやりやすそうだと知り、キャンプのイメージが変わった。食事も重要な要素であるから、キャンプ飯についてももっと魅力を伝えてもらえると、さらにイメージが上がったのではないか。出演者のリアルな表情や全身での表現が自然体でよかったし、いままでキャンプに魅力を感じてこなかった人にも刺さる内容だった。

○　キャンプを通して地域の魅力を発信するという番組は、いままでに無い切り口だと感じた。さらにキャンプに関するハウツーが入った構成も新しく、キャンプは季節を問わない汎用性（はんようせい）が高いコンテンツになってきたので、今後シリーズ化するとよいと思う。東北よりは首都圏で放送することで、東北へキャンプに行きたいという動機を生み、地域の力となるので、ぜひ検討して欲しい。他方、出演者のリアリティーには共感しづらかった。キャンプインストラクターという資格の位置づけが分からなかったこともあるが、インストラクターが体験しているという構図に違和感があった。インストラクターである出演者が素人に教えるという構図であれば、より共感できたのではないか。キャンプ好きな人にとっては、地域の魅力という要素を組み込むことでリアリティーを感じない箇所もあり、恣意性（しいせい）を感じてしまったのではないかと思う。「地域の魅力発信×キャンプのハウツー」という掛け合わせのチャレンジは良さとして残しつつ、そのバランスを工夫して欲しい。

○　キャンプは楽しい反面、準備や現地での面倒さがあり、ためらいも生じるという印象を持っていたが、手軽に楽しむことで子育て世代の余暇にも役立てられるエッセンスがたくさんあることを実感した。ただ、障害のある子どもや大人、その家族でも楽しめるようなバリアフリー情報があるとよりよかったのではないか。外に出てリフレッシュしたいというのは障害の有無に関わらず多くの人が思うことで、障害があっても宿泊しやすいコテージなどの情報も伝えてもらえると、ひとりでも多くの人が幸せを感じることができる、よりよい社会づくりにつながるのではないか。

○　簡単に組み立てられるテントや便利グッズ、トイレ・サウナの設備、近隣の観光スポットとの連携や地元の食材を楽しむなど、一昔前と様変わりしていることに率直に驚いた。雪や寒さを活用した極寒キャンプの紹介では、それらも一つの魅力と捉えていることに新鮮な驚きを感じた。一方、東北のキャンプ場がほかの地域と何が違うのか、どのような魅力があるのかということを、出演者にもっと話して欲しかった。タレントの影響力や発信力と連動すればより東北の魅力が伝わると思うので、そのタレント性をうまく番組に取り入れて、東北の活性化につなげて欲しい。

○　キャンプ初心者にも東北のキャンプ地の魅力が伝わる映像が満載だった。東日本大震災の被災地にあるキャンプ場や、福島県野菜を使ったアヒージョなど、復興を後押ししようとする意気込みを感じた。ただ出演者起用は、時期的に適切だったのかという思いが、最後まで拭えなかった。収録はかなり前だったとしても、「なぜこの時期に・・」という感情が残ってしまった。ジャニーズ事務所（現・ＳＭＩＬＥ－ＵＰ．）に所属しているタレント自身に非はない、出演の機会を奪って欲しくないという思い

と、テレビで見るたびにモヤモヤする気持ちの葛藤を抱えている。この出演者でなければこの番組は成立しなかったのか。当該芸能事務所所属アイドルと視聴者は、今後どのように向き合っていけばよいのか。番組本編とは別の部分で、考えさせられた。

（ＮＨＫ側）

ワンタッチで組み立てられるテントや、おのを使わないまき割りを紹介して、キャンプは簡単だ、キャンプに行きたいと思ってもらえる工夫をした。今回は総花的に取り上げたが、今後はテーマを絞って制作することも考えたい。東北ならではという点は苦労したが、ほかの地域と差別化できるような魅力を念頭に置いて、ＮＨＫプラスなどを通じて全国の人に届けられる仕掛も作っていきたい。バリアフリーという視点は今回の番組では抜けていたので今後に生かしたい。また、出演者起用については、キャンプを売りの一つとして芸能活動している方は大勢いるなかで、ふだんＮＨＫを見ていない人や若い人に番組を届けるために適任なのは誰かという点で議論をした。五感で東北の魅力を表せる表現力がある人として、番組の演出意図に沿って人選した。

＜放送番組一般について＞

○　９月１５日(金)「スピーキング・オブ・ムナカタ」（総合 後 7:30～8:42 青森県域）を視聴した。漫画家・随筆家のヤマザキマリさん、作家の原田マハさん、棟方志功の孫で棟方志功研究家の石井頼子さんのてい談が番組の主でありつつ、生前の映像が要所で挟まれていて、理解が深まる構成だった。てい談は台本感が無く、１時間１２分があっという間に感じた。ヤマザキマリさんと原田マハさんのお二人が、自身もクリエーターである感性から棟方志功について今まで聞いたことのない例え方で語っており、番組に厚みを持たせていると感じた。さまざまな印象に残ることばから、どうして独創性の高い作品が生み出されたのかということを深く理解できた。

○　９月２２日(金)の東北ココから「現場ルポ 処理水放出 東北の海は」を視聴した。処理水の放出開始から１か月がたち、漁業の現状や漁業者の生の声を伝えるタイムリーな内容で、多面的な視点で一連の放出の経緯を総括することは必要だという思いで視聴した。「船を出したくない」という漁師のことばに漁業者の苦悩が凝縮されていると感じ、沈痛な思いになった一方、日本在住の中国出身の方による情報発信を紹

介し、草の根レベルの活動の大事さも主張されていた。沿岸漁業の実態や市場の動向についてデータを基にわかりやすく解説していて、処理水と漁業の関係を多角的に分析していた。このような番組の発信がエビデンスに基づいた政策立案や適切な修正へのきっかけになることもあるので、継続的な取材と定期的な問題提起をしてもらいたい。番組の最後の次の漁に備えて漁具を準備する光景は、「東北の海には歯を食いしばり前を向こうとする人たちがいます」というコメントとともに、エールがこもった余韻のある結びで、応援したいと思う視聴者が多くいたのではないか。

○　９月２４日(日)の「ニュースこまちサンデー」と「ニュース７」を視聴した。「大雨被害の田んぼでボランティアが手作業で稲刈り」という報道について、「手刈りフェス」として面白そうで、ユニークな仕掛けだったからこそ、各地から 150 人程もボランティアが集まったと思われるが、ニュースではそのような要素がそぎ落とされ、単に「ボランティアが稲刈り」と伝えられていた。水害のあった町のその後の活動を、地域のニュースだけでなく全国ニュースでも取り上げることはありがたいと感じた一方で、やや編集し過ぎではないかと感じた。イベントの本質から離れてしまい、他地域での再現やアイデアの転用といった機会を損ねてしまうのではないかと感じる。

○　１０月１３日(金)の東北ココから「世界遺産登録 30 年 白神山地絶景の旅」を視聴した。出演者のタレント・椿鬼奴さんとグランジ大さん夫婦の掛け合いがおもしろく引き込まれ、気が付いたらブナや森の生態系のことも学ぶことができていて、とてもよい番組だった。秋田では熊の被害が多発していて、大きな問題となっている。暮らしの形が変化する中で、人が山に入ることが減っている結果として、熊が人里に近づいたり、山の保水力が弱まって土砂崩れを引き起こしたりと、森との向き合い方が災害につながっていると感じる。人と森との関係は、子どもの遊び環境やエネルギー問題にもつながり、多くの課題の起点となっており、あらためて森との向き合い方や、知恵のある環境作りを探る番組を制作して欲しい。

○　１０月１３日(金)の東北ココからを視聴した。白神山地を取り上げた番組は過去にも見たことがあるが、今回の番組はクイズ形式などでブナの生態や森の生態系について楽しく知識を深められたとともに、マタギの知恵に触れることができ興味が湧いた。出演者の掛け合いや山を楽しんでいる様子も伝わりとてもよかった。

○　１０月１５日（日）のＮＨＫスペシャル「ＯＳＯ１８　“怪物ヒグマ”最期の謎」を視聴した。東北では熊による被害が過去最大になっている県もあり、ＯＳＯ１８のこともひと事ではないと捉えている。熊による被害を、単にセンセーショナルに伝えるのではなく、専門家の意見を取り入れた科学的知見から、“怪物ヒグマ”がなぜ生

じたのかを丹念に浮き彫りにしていた。ハンターの視点だけで無く熊側の目線もあり、ディレクターの執念もかいま見え、まるで警察の捜査か、映画を見ているような感覚だった。最後の東京のジビエの料理店でＯＳＯ１８の肉が評判になり、客が集まっているシーンは、人間の身勝手さ、業のようなものを感じた。熊との共存の道があるのか、積極的な駆除をせざるを得ないのか問題提起をされたと感じ、考えさせられる番組だった。東北にいるツキノワグマでも人間が食べられるという被害がかつてあり、東北オリジナルの熊の特集も期待したい。手遅れになる前に熊対策についての機運を高めて欲しい。

○　「おはよう日本」では、社会的養護を必要とする子どもたちの話題をよく見る。児童福祉法の改正によって、里親家庭や児童養護施設での自立支援に対しての年齢上限が撤廃されるニュースを詳しく取り上げていて、興味深く視聴した。里親養育を広く社会に伝え、里親・里子にどのような支援が必要かという情報を伝える取り組みを続けて欲しい。

○　「サラメシ」を視聴している。お昼ごはんやお弁当を通してその人の生きる姿を見ることができ、みずからの人生を考えさせるような一面もある。

○　９月１５日(金)のＴＡＲＯＭＡＮ「ひとやすみタローマン(釣り堀編)」（総合 前2:41～2:46）を視聴した。この岡本太郎式特撮活劇に限らず、アート系番組のバリエーション、ギミック、発想がすばらしい。高度成長期のアートとコンテンツを掛け合わせるアイデアや時代背景の投影がおもしろい。ＣＧとは異なる特撮の文化が今後の世代にも残っていって欲しいので、子どもが楽しくアートに触れられる番組を今後も制作して欲しいし、東北ならではのコンテンツができたら面白い。

○　１０月１日(日)のＤｅａｒにっぽん「会社員フォーエバー～新宿高層ビル のど自慢大会～」を視聴した。ビル１つの中にもこのように温かい文化があると知ることができた。いまでは貴重な、昭和の熱いサラリーマンを思い出し、懐かしさもあった。コロナ禍を経た４年ぶりの開催を取材したことで、現代においての働く価値や会社組織のあり方を考えることにもなり、その点でも有意義な内容だと思った。取材対象となった３つの会社に共通して、働き方や価値観の多様化、世代間ギャップなどが浮き彫りになり、それらがのど自慢大会を通して、それぞれに変容があったことが物語として伝わり印象的だった。自分は昭和世代だが、若い世代はこの番組をどう見るのか、知りたいと思った。

○　１０月５日(木)のＮＨＫ ＭＵＳＩＣ ＳＰＥＣＩＡＬ「浜崎あゆみ」を視聴した。

“ayu”の２５年間を凝縮して知ることができた４５分間だった。浜崎あゆみから逃げたかったと涙ながらに語る姿が、２５年間を物語っていると感じた。すべての作詞を自身で行っていることを知り、リアルな直筆の紙や手直しされている文字に驚いた。演出や曲順もよく、１つのコンサートを見ている感覚で感動した。歌詞からも“ayu”が伝えたい等身大の気持ちが込められていると感じた。久しぶりに“ayu”の歌を聞き返してみたいと思うきっかけになった。

○　１０月８日(日)の明日をまもるナビ「語り部クロス」を視聴した。東日本大震災や原発事故の被災体験を持つ語り部たちが、全国の語り部たちと交流し悩みを語り合うなかで、語り部としての苦悩や葛藤を率直に表現し、「過去にあった出来事を伝えていく」という強い思いで通じ合った対話一つ一つのことばに重みがあり引き込まれた。中でも福島県大熊町出身の語り部と、ハンセン病を語り継ぐ語り部の対話には大いに心を動かされた。互いの存在を知ることで孤立感が癒やされ、語り部を続けていく自信を取り戻したように見えた。様々な事情から、途中で語り部を辞めてしまう人も少なくないが、この「語り部クロス」のように、語り部の苦労や葛藤に寄り添い、その存在意義を共に探っていくような番組は大変貴重なので続けて欲しい。

○　１０月１４日(土)の探検ファクトリー「料理の強い味方 海外でも注目！日々進化する南部鉄器工場」を視聴した。溶かした鉄を、南部鉄器の業界では「湯」と呼んでいることや、溶けた鉄１５kg を　　大きなひしゃくで酌んで型に流し込む熟練の技など、自分は岩手出身だが、知らないことがたくさんあった。かつては民芸品というイメージだったが、今はおしゃれでふだん使いの物が増えていて、海外での人気も高まっているといった、一昔前の知識をアップデートする情報があったのがよかった。番組の中では岩手県出身の大瀧詠一さんの曲が使われていて、ご当地に気を配って細かいところにも神経を使っていることに感心した。

○　連続テレビ小説「ブギウギ」を視聴している。放送だけでなく、ＳＮＳで制作の裏側や脇役にスポットを当てた投稿を見ることができ、それぞれの役にも深みが出てより楽しめている。実在の人物をモデルにした物語は、人生に触れる喜びやうれしさ、悲しさ、悔しさへの共感が大きいと感じる。

○　子育て中なので「おかあさんといっしょ」を視聴している。時代の流れとともに、障害のある子どももゲストとして参加していることが多々あり、喜ばしいことだ。障害のある子を持つ親が、子どもと共に社会に一歩踏み出していくことは勇気の要ることなので、このような番組を通して後押しになるような働きかけを続けて欲しい。

○　１０月１３日(金)のねほりんぱほりん「投げ銭にハマった人・前編」を視聴した。言いづらいことをかわいいキャラクターが代替して言うという表現手法がすばらしく、オープニングやギミックには８シーズン目ならではの新しい手法が使われていて、楽しく見ている。今回のテーマは「推し活」などのラインのバリエーションで、ややマンネリ化を感じてしまったので、新しい視点の切り口が出てくることを楽しみにしている。

○　１０月７日(土)街角ピアノ「スペシャル 角野隼斗 ニューヨークを行く」（ＢＳ１ 後7:30～8:59）を視聴した。序盤の「街角ピアノ」らしさから一転して、番組の中盤からはピアニスト・角野さんの新たな挑戦、といった人ものドキュメンタリーのトーンになったかと思ったが、番組すべてを見ると「街角ピアノ」であるよさが出た面白い番組だった。ピアノ自体を定点観測するいつもの構成とは異なる形で、９．１１の跡地という場所柄もあり、感動的な演奏を見ることができた。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０２３年９月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

９月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、２１日(木)、ＮＨＫ仙台放送局において、７人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、被災地からの声スペシャル「“声”でかんがえる課外授業～仙台市立岡田小学校～」も含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、１０月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	松沢　卓生（株式会社　松沢漆工房　代表取締役）
副委員長	南條　和恵（仙台大学柔道部女子監督）
委　員	昆野　勝栄（河北新報社　論説委員会論説委員）
	佐々木　裕司（東北電力株式会社　常務執行役員）
	佐藤　多恵（シンガーソングライター）
	永井　温子（株式会社 Ridun　代表取締役）
	前川　直哉（福島大学教育推進機構高等教育企画室　准教授）

（主な発言）

＜被災地からの声スペシャル「“声”でかんがえる課外授業
～仙台市立岡田小学校～」（総合　９月９日(土)放送）について＞

（ＮＨＫ側）

「被災地からの声 つぎの一歩」のスペシャル版として制作した。東日本大震災の９日後からスタートして１２年半継続している番組。震災直後から現場に行って、一人一人の話をじっくり聞き、いま一番言いたいことをスケッチブックに書いてもらうという構成で始めた。これまで延べ 5000 人の話を聞き、その記録はいまも保管している。今回は、震災から１２年たち、震災後に生まれ、震災を直接知らない小学生に被災体験をどのように伝えればよいかが学校現場でも課題になるなかで、実際にその小学校で避難生活をしていた大人が、自分たちの体験を伝える授業をできないか模索する中で企画した。

○　総じてよい番組だった。感心したポイントは３つある。まず、子どもたち自身が、好奇心から素朴な質問が次々にでていたこと。そして、リアルさを追求していたこと。寝る、食べる、トイレのそれぞれを体験する中で、アルファ化米を定量より少ない水で戻して食べたり、紙粘土と水で排せつ物を再現して簡易トイレに入れ、それを子どもたちが触って処理したりと、手触りのあるリアルさを体験させる方法があるのだと感心した。さらに、子どもたちの発言を誰ひとり否定しない大人たちの視点が非常によかった。子どもたちの素直な反応が引き出せて、大人ともかみ合ったコミュニケーションができたのは、被災後も小学校区が残り、地域のコミュニティーが維持されている、岡田小学校という舞台の設定がよかったからではないかと思う。津田アナウンサーの進行も押しつけがましくなく、子どもと大人の両方の声をうまく引き出しており、いつもながら感心した。

○　最初に番組タイトルを聞いたとき、声だけで考えるのかと不思議に思った。写真や動画などのビジュアルイメージの力は強いと思っていたが、子どもたちがいま通っている小学校が避難所だった際の話を聞くことで、震災を一気に自分事化していく様子を見て、“声”から考えるというタイトルに偽りはないと感じた。子どもたちの素朴な視点での質問は、震災を真に自分事化したからこその視点で、それこそが、震災を身近なものとするという教育目標にかなう仕組みになっていたと思う。避難生活の体験等も含めて、とてもよい教育実践で、ＮＨＫには教育現場の震災の継承をめぐるさまざまな教育実践を広く報じていただきたい。

○　体育館での避難生活が大変だろうというのは想像に難くないが、当事者の話を聞く機会は少なく、貴重な機会だった。先生役の大人たちの話を聞いている子どもの表情は真剣そのもので、また多くの素朴な疑問があがるというのは、それだけ興味や関心をそそる内容だったからだと感じる。一点気になったのは、「寝る」体験をするチームの子どもたちが、上履きを脱がずに布団やござに上がっていたこと。体験をよりリアルなものにするためにも、靴を脱いで欲しかった。先生役のひとりが「すべての財産を失ったけれども、最も大切な財産を得ることができた」と言っていたのが心に残った。つらいことばかりではないと感じさせる前向きなことばも多かった印象で、震災後に生まれた子どもたちに震災を伝える取り組みは、意味のあることだと感じた。

（ＮＨＫ側）

過去に避難所になり、なおかついまも小学校として残っている場所は非常に少ない。その中で岡田小学校を選定したのは、学校としても被災体験の継承を課題としてとらえていたためだ。この課外授業のまえに、東日本大震災について学ぶ授業を学校

側が行うなど、非常に協力いただいた。実際に避難生活を体験した人のことばはとてもリアルで、さらにこどもたちの素朴な疑問が、先生役も忘れていた記憶を引き出すなど、想定以上によい課外授業になった。小学校だけでなく公民館なども舞台として、番組に限らない展開を公共メディアの地域貢献として考えていきたい。

○　キャスト、場所、内容どれもすばらしかった。震災後に生まれた世代に、震災の記憶をいかに伝えるかは大切なことだが、体験談を伝える機会があまりないなかで、実体験に裏打ちされた話や、視覚的な伝え方は、理解を促す有効な試みだということを改めて感じた。先生役の年代バランスがとてもよく、それぞれの年代や立場から震災の受け止めを実直に語っていて、そのときの思いが伝わってきた。また先生役は共通して、人への感謝の大切さを真実の言葉でしっかり伝えており、まさに教育の本質といえる。見ている側も自然に学べる、本当におもしろい企画だった。

○　参加者がマスクをしていないことで、ことばだけではなく表情からも、それぞれの思いが伝わってきた。子どもたちにとっては、特に１０代、２０代の年が近い大人からの声はよりリアルに感じたのとではないか。避難所での生活を追体験するというのは、ただ聞くだけでは得られない大事な機会だと思った。同じような状況になった場合に、課外授業を受けていた子どもたちも、視聴者も、自分にできることをするという意識を持つことができた番組だったと感じる。被災地域だけではなく、広くこの課外授業の取り組みを実践して欲しい。

○　実際に避難所となった小学校で授業を行っていることで、子どもたちにもよりリアルに受け入れられている。体験することを通して、人と人との思いやりにも気づく機会となっていた。今後は、被災地だけではなく、全国の小学生に授業を行って欲しい。また、伝達と同時に記録が大切だと改めて感じた。「被災地からの声」が１２年半にわたって“声”を記録し続けていると聞き、年月を経るごとに感じ方は変化するものだと思うので、その時々の記録を残すことは大事だと学んだ。思い出したくないこともあるとは思うが、このような番組を目にすることで、将来起こりうる災害に対して心の準備をしておくことも、必要なことだと感じた。

○　学校現場では、新しい学習指導要領などで主体的に学ぶアクティブ・ラーニングが重視されているが、今回の番組ではその実践例を見ることができた。過去の「被災地からの声」の出演者に先生役になってもらうのはとても画期的で、震災直後から蓄積がある番組ならではと思った。特に、トイレの問題などは、デリケートな話題ではあ

るものの、避けられない課題があるということを子どもたちなりに感じ取ったのではないか。震災の体験の中で、生と死に向き合って長い避難生活をしたという経験を、今後も番組を通じたリアルな防災教育や、リテラシーを高めるような番組企画によって伝え続けて欲しい。

○　防災教育においてＮＨＫが率先して課外授業を企画し、実施したのはすばらしい取り組みだと思う。被災直後のリアルな様子を“声”や映像で記録していたり、当事の避難者を先生役に迎えられたりするのは、ＮＨＫだからこその防災教育と感じた。被災した家に泥棒が入る、仮設トイレがあふれる、など当時の様子をありのまま伝えていたことも、当事者ではない視聴者が避難生活に想像力をめぐらせる大切な機会となった。子どもたちの感想では、何気ない日常の尊さが語られていたが、それだけみずからに置き換えて考えられる機会となった証しだと思った。とおりいっぺんの避難訓練しか実施できない学校も多い。子どもたちが偏りなく災害について学べるよう、今回のようなＮＨＫ発の優良な番組や取り組みをより多くの子どもたちが触れられるように広げて欲しい。

（ＮＨＫ側）

先生役は、ディレクターが過去に出演した人を取材する中で、当時同じ小学６年生くらいの世代の人など、ねらいをもってお願いした。ただ、課外授業の進め方はほとんどお任せしており、子どもたちとのやりとりは想像を超えるものだった。３つのグループ分けについては、寝る・食べるはすぐに思いついたが、トイレというアイデアは当初なかった。放送時間帯なども考慮すると難しいのではないかという意見もあったが、生きていく上でとても大事なことだと判断。実際にいちばん盛り上がる結果となって、制作者としても驚いている。大人がだれも子どもたちの考えや気持ちを否定せず、とてもよい空気感の授業だった。個性を持った子どもたちが大人になったとき、それぞれ活躍するイメージができて、子どもの力を改めて感じた。本日のご意見を生かして、第２弾、第３弾も考えていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　８月４日(金)の東北ココから「“同じで違う”傷を、共に生きて～震災から１２年 夫婦の日々～」を見た。息子を失ったという事実は同じでも、夫婦でその受け止め方や

行動がまったく異なっていて、複雑な人間の内面に迫ろうとした番組だと感じた。夫婦は同じ傷を共に助け合って生きているというように思いがちだが、生前の息子たちへの想いには夫はざんげ、妻は悔恨というしこりがある。これが底流に流れる夫婦の違う傷を表現したことばなのだろうと思って見ていた。息子を亡くしたことにすれ違いの表現を持ちながらも、頼れるのはやっぱり結局二人きりで、それぞれ違う表現で感謝を表し、助け合いながら生きていく。複雑な思いを織りなす夫婦の等身大の日常を表していた。

○　８月２５日(金)の東北ココから「限界集落住んでみた 福島編」見た。担当の２年目ディレクターが良かった。出しゃばるのではなく、取材者として集落の方の話に耳を傾けており、同じ県の出身ということも強みで、集落の方が親近感を持って話していた。住んでいる人のちょっとした会話に、集落への愛があふれている。放送では、見届け人のタレント 白鳥久美子さんとディレクターの掛け合いも番組に彩りを添えていて、とてもよい番組に仕上がっていた。ひと言でいえば、マスメディアと集落の最高の出会い方だったと感じた。

○　９月１日(金)の東北ココから「みなとまちの小さな新聞」を見た。私自身、ニュースはネットだけで新聞はほとんど読まないのだが、この新聞は地元の７割の世帯が読むと冒頭に出てきて、すごい数だと思った。毎日のことだからこそ、地元の情報だけで紙面を作るのは大変だと思ってはじめは見ていたが、地元の人の顔が見える近い距離感での取材だからこそ、新しい発見がありネタが尽きないのだとしだいに感じた。「地域と運命共同体」「小さい喜びの分かち合い」という記者のことばからは、地元の方との信頼関係の強さが伝わる。丁寧かつ熱の入った取材や、頭をひねらせて見出しを考える様子などリアルな光景が映し出されていた。新聞っていいな、とあらためて思った。

○　９月１日(金)の東北ココからを見た。俳優の上野樹里さんのナレーションがとても聞き取りやすく、番組に入り込むことができた。記者のことばには力を感じ、妥協のない姿勢が取材、編集の様子や表情から伝わってきた。メディアは客観性がベースにあると思うが、主観が入るからこそできる表現もあるのか、と感じた。市民が市民を取材することでしか得られない情報や雰囲気、空気感があるとわかり、言葉地域への愛着の形成という、地域メディアの重要な役割をあらためて感じることができた番組だった。

○　９月９日(土)のあおもりもりもり「だしソムリエに聞く」を見た。サメをサメ節にして、だしとしても使えることを知ることができおもしろかった。リンゴの皮からも

だしを取って活用できること、その取り方も紹介しており、すぐにでも試したくなる内容だった。サウナイベントの中継では、身近に知っている情報が出ていて、地域密着ならではのうれしさを感じた。イベント主催者や出店者の話をもう少し聞きたいと思った。

○　９月１５日(金)の東北ココから「マグロがとれても喜べない～“資源保護”の裏側で～」を見た。定置網に小型のマグロがかかって、漁師や定置網漁業者が困っているという報道は過去にもあったが、さらに話を広げて放送にしたという姿勢には敬意を表したい。定置網漁業はこれまで資源に優しい漁法だと言われており、沿岸漁業を維持して漁業集落が存続していくためには、定置網漁業を悪者にしたくないという思いで視聴したが、定置網にかかった小さいマグロを漁獲報告しないまま捨ててしまう映像は衝撃的で、短絡的なメッセージにならないか心配になった。水産業の課題を一般の視聴者に伝えるためには、多くの前提を説明したうえでないと大事なところがわかってもらえないという難しさがあると感じる。水産資源の保護のことを考えるには、消費者がどうするかという点も同じ番組で取り上げないと、本題まで届かない。難しく奥深いテーマなので、何度でも挑戦してほしい。

○　９月１８日(月)の東北ココから「限界集落住んでみた 福島編 たっぷり４５分版」(総合 後 2:05～2:50 東北ブロック)を見た。純粋に田舎の集落のよさを感じることができ、今までのシリーズの中で一番ほっこりした。担当ディレクターの人柄か、集落の方と心を開いた付き合いができていた。集落の人と看板を直したり、編み物をプレゼントされたりと、人と人とが心からつながっていることの証しとして、思い出とともに物を残すことは非常に大切だと感じ、そういったシーンを丁寧に撮影していたのがとてもよかった。限界集落シリーズはディレクターの人柄が番組の雰囲気を決めていると思う。今後もいろいろな県のバージョンを楽しみにしている。

○　８月１４日(日)のダーウィンが来た「なんじゃこりゃ!!カブトムシ謎の大集結」を見た。シマトネリコという木にたくさんのカブトムシが集まる理由が掘り下げられていて興味深い内容だった。カブトムシの大量発生という身近な疑問から、人の営みの変化や環境問題にもつながっていて納得感があった。

○　８月２２日(火)の時論公論「処理水放出決定へ 理解は得られたか」を見た。決定の背景や根拠、国際的な反応、国内の利害関係者の反応、漁業関係者の受け止めなど、内容を簡潔に整理していて、ふかん的で的確な解説報道だった。漁業関係者が望むのは持続可能な漁業であるという課題の指摘も的確だと感じた。処理水の問題は感覚的に捉えられることもあるなか、客観的な事実に即して淡々と解説する公正な報道は、

ＮＨＫの報道姿勢を示している内容だった。

○　９月８日(金)のアナザーストーリーズ運命の分岐点「世紀の番狂わせ～そして彼らはヒーローになった～」を見た。2015 年ラグビーワールドカップで日本が強豪・南アフリカに勝つことができたのは、外国人コーチを招へいしたからとか、スター選手がいたからという単純な理由ではなく、結果を出すために今までにない練習量をこなしてとことん取り組んだから、ということが検証された点がよかった。

○　９月１６日(土)のＢＳドキュメンタリー「お母さんに会いたい～フィリピン・ムスリムの兄と妹」(総合 前 1:00～1:50)を見た。2004 年の番組だが、何度も再放送されていると聞いた。涙なしでは見られない。５０分のなかで、親と子の絆や貧富の差などいろいろなもの表していて、心に突き刺さるすばらしい番組だった。これからも、よい番組は何度でも流してほしい。

○　７月２１日(金)きんよる秋田「緊急報告 秋田大雨１週間～あのとき何が 必要な支援は～」を見た。何よりもタイムリーに特設番組を組むという迅速な対応がありがたいと感じた。市民から２００を超えるスマホ映像を入手するなど、必要な情報をすぐに集めて番組にするというのはすばらしいと思う。災害が起きた原因についても、専門家の分析を、番組を通じてわかりやすく知ることができて、非常によかった。医療の問題や、商店、避難所などの実態を幅広く伝えていたほか、支援したい人に対する支援拠点などの情報が伝わった点もよかった。「あの日何が起きていたのか」という言い方は過去形に聞こえてしまい、「今回何が起きたのか」といった言い方だと配慮が感じられてよりよいと思った。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０２３年７月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

７月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、２０日(木)、ＮＨＫ仙台放送局において、８人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、２０２３年度後半期の国内放送番組の編成について説明し、２０２４年度の番組改定と合わせて意見交換を行った。

続いて、東北ココから「自分らしい世界は少しずつだけど広がっていく」を含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、８月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	佐藤勘三郎（株式会社ホテル佐勘　代表取締役社長）
副委員長	南條　和恵（仙台大学柔道部女子監督）
委　員	昆野　勝栄（河北新報社　論説委員会論説委員）
	佐々木　裕司（東北電力株式会社　常務執行役員）
	佐藤　多恵（シンガーソングライター）
	永井　温子（株式会社 Ridun　代表取締役）
	前川　直哉（福島大学教育推進機構高等教育企画室　准教授）
	松沢　卓生（株式会社　松沢漆工房　代表取締役）

（主な発言）

＜「２０２３年度後半期の国内放送番組の編成」および
「２０２４年度の番組改定」について＞

○　ジャニーズ事務所の扱いなど、出演者のキャスティングに当たって、現時点でどのような考え方になっているのかがよく分からないが、海外やさまざまな団体から非常に厳しい目を向けられている現状を踏まえ、来年度の番組改定に向けてどのようなことを考えているのか教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

ジャニーズ事務所に関しては、事態がまだ動いていることもあり、現段階で明確な方針を打ち出しておらず、世論を含めた状況の推移を見ながら、適宜判断していく形になる。今回のケースは事務所の問題だと捉えているが、二次被害をはじめ、新

たな問題が発生する可能性もあるため、出演者の中に被害者がいるかもしれないという視点を忘れないようにしたい。

○　しっかりと報じてこなかったメディアの責任という意識が欠落しているのではないか。今回初めて表に出た問題ではなく、これまでに一部の週刊誌で記事になったり、裁判が行われていたにも関わらず、メディアは報道もせず、テレビ局も何も対応してこなかった。そこに何か構造的な問題があって、結果的に被害を拡大させたのではないか。

（ＮＨＫ側）

ジャニーズ事務所の件については、指摘の通りだと思う。ＮＨＫをはじめとするマスコミのなれ合いなどが取り上げられており、自分たちも認識している。総合テレビの「クローズアップ現代」で、この問題を報じたときに、キャスターが番組冒頭で、ＮＨＫのこれまでの姿勢に対するお詫びを申し上げた。この問題は、まだまだ続くので、今後も検証を行うなど、さまざまな形で取り上げていくべきだと考えている。

○　福島の原発事故から１２年がたち、県内外の温度差、違いを強く感じている。東北６県で放送される番組もあるので、東北では現状のかなりの部分を共有していると思うが、実際に原発の電気を使っていた首都圏の人たちは別の国の話のように見ている、そのような感覚があるのではないか。これは福島だけの問題ではなく、全国の問題なのだということを、他県にも発信していってほしい。視聴率が取れないのは承知しているが、だからこそＮＨＫに頑張ってもらいたい。

（ＮＨＫ側）

福島の件は、自分もここ数年東京にいるため、受け止め方の温度差については、指摘されて改めて実感した。今後も大切な情報が全国の視聴者に届き渡るよう、３月１１日近辺での特集はもちろん、それ以外にもさまざまなコンテンツを放送、展開していきたい。

○　「よみがえる新日本紀行」「あなたの町の映像アルバム」など、アーカイブを活用した番組がいくつかあるが、いま保存されている番組、映像の中で、公開されているのはごく一部だと聞いている。権利関係やコスト面など難しい問題はあると思うが、視聴者にとっては関心の高い部分だと思うし、社会的な還元という意味も大きいの

で、こちらも充実させてほしい。

（ＮＨＫ側）

アーカイブをいかに活用するかというのは今後の最重要ポイントの一つだと捉えている。指摘の通り、権利関係をクリアするのが難しい。とりわけ、どこまでクリアすれば放送できるのかといったところの判断が難しいが、ちょうど今月アーカイブに関する専門チームが立ち上がったので、今後一層力を入れていく。合わせて、各地域に保存されているアーカイブの発掘作業も進めていきたい。

○　不祥事を起こした方の出演自粛や、放送見送りというケースがあるが、直近で不祥事を起こした人が出演していれば放送を取り止める、ある程度の時間が立っていれば大丈夫、といった基準があれば教えてほしい。

（ＮＨＫ側）

非常に難しい問題だ。罪を犯している場合とそうでない場合や、放送したときに視聴者の方々がどう思うかといった部分でも考え方は変わってくるため、番組の中でその人がどのような役割を担っているかなども含め、その都度議論し、総合的に判断をしている。議論の中で、はっきりとした基準があった方がよいのではないかという声もあるため、可能な範囲で少しずつ整理していきたい。

＜東北ココから「自分らしい世界は少しずつだけど広がっていく」
（総合　６月１６日(金)放送）について＞

（ＮＨＫ側）

フリースクールに通う若者たちを１年以上前から取材、撮影し、番組化した。不登校やひきこもりを経験した子どもが、仲間や大人に出会いながら一歩一歩進んでいく様子を見つめたもので、現在、小中学生の不登校が過去最多というニュースなどもあるが、学校が合わない人や進路に迷っている人、その親の方々などに見てもらいたいというのはもちろん、不登校の当事者でない人たちにとっても生きるヒントになるような番組にで

きればと思って制作した。制作に当たって現場として大切にしてきたのは、不登校になった理由や学校のあり方ではなく、その先の生き方であり、そこにスポットを当てて発信したいということを繰り返し議論した。

○　フリースクールに通っている子どもたちの中には、顔を出したくない、名前も出したくないという子たちも多いと思うが、あれだけ素の表情、自然な様子を見せてくれたというのは、信頼関係があったからだろうと思う。「フリースペースつなぎ」は、単なる居場所ではなく、さまざまな道があることを伝える活動もしており、素晴らしかった。多様な生き方を大切にする社会、それを作りたいと考えつつも、つい正解、ゴールを求めてしまう自分がいて、そういう自分に対してモヤモヤしていたが、代表の中村さんの「つなぎは正解がないからね」ということばが染み入った。とてもよい番組だった。

○　自分らしさを取り戻すには、社会の側が寛容に受け入れる居場所を作ることも政策的には必要で、この気仙沼の「フリースペースつなぎ」がそのモデルケースの一つになっており、１０年続いていることはすばらしいと思った。中村さんは、柔和で包容力があり、生徒が自分の良さを見つけられるようさまざまな機会を提供し、自分から一歩踏み出せるよう辛抱強く待っていて、これが教育者のあるべき姿なのだと感じた。番組の中で「人と関わる力や自分の好きなことを知ることが生き方を支える」「その先に何が待っているのだろう」「一緒に見つけていこう」「みんなで考えてみんなでやることが正解」といった示唆のあることばが随所に散りばめられていて、とてもメッセージ性があった。

○　「生き方を支える」という中村さんのことばにとても胸を打たれた。子どもたち一人一人のコメントが、どこかから借りてきたことばではなくて、自分の体験を通じて自分の中から出てきていることばで、すばらしいと思った。番組の中盤、「フリースペースつなぎ」に通う麻貴さんのインタビュー映像で、後半部分がカットされたように見えた。ことばに詰まってしまった、プライベートな部分だったといった理由はさまざまあると思うが、違和感が残った。中村さんがこうじゃないといけないというのを押しつけずに、一緒に考えていこうというスタンスなのが素晴らしかった。番組全体として、悩みを抱えている人たちとそのような人たちと一緒に歩んでいこうとしている人たちの両方の背中を押す内容になっていたと感じた。

○　番組のタイトルに「気仙沼フリースクール」と入っていたが、番組内では「フリースペースつなぎ」と紹介されており、フリースクールとフリースペースの定義が分か

らずに混乱した。「つなぎ」は、不登校を経験した子たちの憩いの場であり、救いの地になっていて、自分を知るために必要な場所になっていると感じた。「つなぎ」に通う子どもたちが変わっていく姿を目の当たりにし、誰かと関わることで人は変われるということを再認識した。麻貴さんのヨーヨーの姿にとても感動し、中村さんのように否定せずに話を聞いてくれる人が本当に必要だと思った。番組の最後を子どもたちの笑い声で締めるというのも良く、すばらしい番組だった。

（ＮＨＫ側）

フリースクールとフリースペースについて、フリースクールは学校に代わる教育機関の一つの名称、総称で、「フリースペースつなぎ」というのは、それぞれ自由につけられる場所の名前であるが、フリースクールの中の制度のことなど、最低限の必要な情報が足りていなかったと感じた。また、ＮＨＫでも不登校のキャンペーンやホームページなどでの展開を行っているが、そのようなところにうまく結びつけられればより良かった。指摘については、ことばがスムーズに出てくるわけではない状況の中で、どこまで伝えるか、どのような形で編集すべきかというのは少し見直してみたい。

○　学校に行けなくなった先生も同じように悩みを語っていて、不登校は子どもだけの問題ではないと分かった。世の中に出てもさまざまなつまずきがあり、自信を喪失して、やりたいことを見つけることも、始めることもできず、少し力を回復するまでどこかで充電しなければならず、それができる場所がまさに求められているのだと感じた。予算の確保など、「つなぎ」の運営面の情報がほとんどなかったので、少し気になった。個人的にはすっきりした終わり方ではなかったが、「つなぎ」のような居場所を作ることの大切さ、元気を取り戻すための役割を担える地域の場所というのが本当に大切で、そのことがしっかり伝わってくる番組だった。

○　代表の中村さんの娘さんの不登校がきっかけで立ち上がったフリースクールということで、現在も親子で運営しており、フリースクールの意義などを世間に広げようとしている姿はすばらしいと思った。このような自分のことを肯定してくれる居場所や、年齢の上下関係なく遊んだり、語り合える人がいる場所、社会で失敗しても戻ってこられるような場所を設けるのは、行政などの役割という気もするが、いまだに学校や職場、家庭が基本になっていて、そのような固定的な観念がまだまだ一般的であると感じた。100 人プロジェクトというのは大変すばらしい取り組みで、地元でも知らないような職業やゲームのプログラマーの方が出ていたが、こういったことは学校

ではなかなか教わらないため、子どもたちには大きな気付きになるのではないか。不登校がどんどん増えている中、「つなぎ」のようなフリースクール、フリースペースは、地域の人にとって一層大事な場所になっていくと思うので、宮城以外の他県の状況も含めて継続して取材してもらいたい。

○　フリースクールと聞くと、挫折をしてしまった子や、人となじむのが難しい子が通うところというイメージがあり、そのような子どもたちの話なのかなと思って見ていたが、各々の環境ではうまくいかなかった子でも、違う環境では自分に合うものがあるという、よいロールモデルを見せてもらった。中でも、麻貴さんが周りから背中を押され、ヨーヨーをみんなの前で披露した姿はとても印象的だった。人の輝くタイミング、出会うタイミング、自分がやりたいと思うタイミングは人それぞれだということを、番組を通して再認識した。このような番組が、まだ自分に自信を持てていない子にとって、何か変わるきっかけとなるような気付きになってほしいと思った。

○　とても長い期間をかけて丁寧に作られた番組だった。雪の降っているシーンから、最後は春の息吹の象徴であるつくしのシーンがあって、笑い声とともにフェードアウトしていく、非常に印象的なラストだった。不登校やフリースクールは、ドキュメンタリーではよく扱われるような気もしており、どう描いていくのか関心を持ちながら見たが、何人かを紹介しながら、次第に、麻貴さんにフォーカスさせ、そこに１０周年というイベントも絡ませるという、メリハリのついたよい構成だった。予算面も含め、「つなぎ」がどのように運営されているのかというのは私も気になり、運営側の苦労も見てみたいと思った。

（ＮＨＫ側）

中村代表のことばやみなさんの意見を聞いて、大人の姿勢が問われる現場、番組だなと強く感じた。番組には入らなかったが、フリースクールに通わせる親も自分たちがイメージしたゴールにこだわってしまい、子どもたちには子どもたちなりの進み方があるということ、タイミングがあるということを受け入れられるまでにとても時間がかかるという話があった。不登校やフリースクールを取り巻く環境がどんどん変わっていく中で、メディアの立ち位置や、どういうスタンスでこの場を表現するか、コメントするかといったことは刻々と変わっていくので注意を払った。運営側の情報は、このような場所をもっと社会に広げていったり、接続させていったりするうえでも、とても大事な情報なので、何らかの形で入れられれば、より深く理

解してもらうことができたかもしれないと思った。

○　中村代表の「つなぎ以外にも接点を持ってほしい」ということば、そしてその実践の様子は「つなぎ」の名を体現する取り組みだと感銘を受けた。現在の教育環境になかなか合わない子どもたちが一定数いる中、そうした子に合った学びとは何か、どのようにしたら一人一人の興味関心を生かす学びのあり方を作れるかという点において、子どもたちが「地域で働く大人」と出会える環境や話を聞く機会は非常に大切だと思う。さまざまな働き方、学び方をしている大人の背中を目にする一方で、夢中で遊ぶような体験を通じ、子どもの学びや好奇心の芽が育まれていて、番組を通して大きな希望を見出した。番組タイトルの付け方も、子どもたちが一歩ずつ歩む様子とリンクしており、絶妙だと感じた。

○　不登校など、自分ではどうしようもない、出口のない長いトンネルに入ったような状態になったとき、一筋の細い光が差し込むような「つなぎ」の存在は本当に大切だと思う。地域にそのような場があるのとないのとでは大きな違いになるということを改めて感じた。番組では子どもたちや青年たちの葛藤、変化、成長の様子がことばの一つ一つから伺え、とても心に響いた。ハッとさせられるシーンもあり、子どもたちの思いやことばは、悩みを持つ多くの人々の代弁者でもあるようだった。発達障害、いじめ、不登校が増えている中で、「つなぎ」のようなフリースクールだけでは限界がある。居心地のよい場所、体温を感じる人間関係、人と比較せず自分らしく生きられる社会を作ることが大切であり、理解や支援が広がるためにも、こういった番組をより多くの方に見てもらいたい。

＜放送番組一般について＞

○　６月１６日（金）の発見！あおもり深世界「王林と考える青森りんごの未来」を見た。番組の冒頭でゲストの王林さんの話の中で、とてもマイナーなリンゴの品種が出てきて、さすがだなと思った。新しい栽培方法の紹介で、台木の説明がとても分かりやすかった。植えてすぐに収穫できる技術が紹介されていたが、メリットだけではなく、コストなどネガティブな面も紹介してほしかった。全体としては「青森りんごの未来」というタイトルだったが、ほとんど栽培の話だったのが気になった。栽培のほかにも加工や流通、消費など多岐に渡る話があったうえで、今後の青森りんごはどうあるべきかを考えていくほうが、自分ごととして捉える人も増えるのではと思った。今後も青森りんごに関する番組を作ってほしい。

○　６月２３日（金）の東北ココから「あなたは逃げられる？検証・原発事故時の避難計画」を見た。現在の国の避難の考え方である、一斉ではなく段階的に避難するということを前提にして、改善すべきと思われる課題を的確に指摘していた。実効性を不安視する複数の地域の住民の声を紹介したり、道路状況などを不安視する背景、根拠を映像やイラストなどを用いて具体的に示したりしていたのも良かった。地域住民と宮城県双方の見解を示したうえで、専門家と記者がやり取りをして、避難の問題点や計画策定に向けた住民の関与の必要性を指摘しており、偏った内容にならないよう全体のバランスを配慮し、実効性向上に向けて独自の具体的な提言を行うという姿勢が感じられた。今後も取材を続け、避難の考え方について理解が進むような報道や発信を期待している。

○　７月７日（金）の東北ココから「「今」をともに～すい臓がんの患者会～」を見た。仙台ですい臓がん患者の会があるということを初めて知ったが、このような交流の場があるのはすばらしいと感じた。タイトルから、重い空気の番組になるのではと思っていたが、終始和やかで、会話を聞いても明るく前向きなものが多く、本当にこの人たちはがんを患っているのかと不思議に感じるほどだった。当たり前の生活の素晴らしさを、ふだん生活している中で感じていないなと、自分自身いつも思うが、がん患者さんのことばにハッと気づかされることが多かった。何気ない会話も大切にしている、生活の一瞬一瞬を大切にして過ごしている、それがとても強く伝わってきた。がんイコールかわいそう、どうしてもそういう印象になりがちだが、そうではなく、がんを患っている、患っていないに関わらず、“今”という瞬間を幸せにどう生きるかということを考えさせられる番組だった。

○　７月７日（金）の東北ココからを見た。代表の方の、すい臓がんの患者を独りにしたくないという優しさから会が生まれたということで、人の優しさや強さをかいま見た気がした。つらいシーンというのはほとんどなく、楽しくなるような行事ばかりで、ダンスや撮影会のシーンでは、どの方も本当によい表情をしていて、一日一日を大切に、先が短いというのが分かっているからこそ毎日を大事に生きるという意思が伝わってきた。子どもと過ごす時間や、職場での何でもないケンカがとてもいとおしいとか、そういうことばを聞いて、しんどいなどと言いながら毎日過ごしている自分を反省した。大切に生きるということがどんなことか、とても考えさせられる番組だった。

○　７月１４日（金）の東北ココから「福島・未来会議 ～対話から生まれるもの～」を見た。「何かをことばにすれば誰かを傷つけてしまう。それが福島の１２年間でした」という冒頭ナレーション、福島に住んでいる人は、何か言うだけで思ってもいな

い誰かを傷つけてしまうことがあると理解できるが、県外の人には伝わりにくいかもしれないと感じた。議論しない、否定しない会議で、見ていてすっきりするどころか、非常にもやもやしたが、そのもやもやが現在の福島であり、それを取り上げてくれてありがたいと思った。福島の問題は、地域だけの問題ではないので、いわきのこの取り組みを、東北だけではなく、ぜひ全国に向けて発信してほしい。

○　７月１４日（金）の東北ココからを見た。この会議で共通認識となっている議論しない、否定しないという考え方は、裁判と対極にある対話の方法だと思った。番組後半で原子力規制庁の役人が「責任がないと思っている国関係者はいない」と言っていたが、他の省庁の役人も同じことを言うのかと想像すると、複雑な気持ちになった。エンディングの「対話を続ける先に優しい未来があるのかも」というナレーションは印象的で、まさにこの番組の趣旨を表現していると思った。もやもやした思いもあったが、すばらしい番組だった。

○　６月１０日（土）、１７日（土）のＥＴＶ特集　ミッドウェー海戦　３４１８人の命を悼む第一部「命の重さ」第二部「残された者たちの戦後」を見た。お金も人も時間もかけられた大作だと想像する。しかし、このようなテーマは視聴率も取りづらく、今後どんどん減っていくだろうが、“８月ジャーナリズム”とやゆされようとも、このような番組は絶対に必要だと改めて思った。現在行われている戦争でも、当然攻めてきた側が悪いと思うが、守っている側にも軍隊の中には暴力や凌辱などがあるかもしれず、戦争の裏側にあるそういったものを、番組で描き出してもらいたい。

○　６月２５日（日）のこころの時代～宗教・人生～シリーズ宮沢賢治　久遠の宇宙に生きる（３）「ほんたうのたべもの」としての童話を見た。宮沢賢治が短期間に大量の童話を書くことができたのは、法華経の教えがあったからということを初めて知った。地位や富、そういったものを持つのではなく、ありふれた朝日の色や風の香り、そういった身近で見過ごされそうなものを改めて感じて、生きている日常の中に本当の幸せがあるのではないかということを宮沢賢治は童話を通じて伝えていて、改めて宮沢賢治の作品を読み直してみたいと思った。講師の北川前肇先生は、浄土真宗、日蓮宗、天台宗といった宗派を越えて分かりやすく話をしていて、とても勉強になった。盛岡や花巻でロケもしていて、もっと地元の人に見てほしいと感じた。このような教養番組の宣伝はあまり見かけない気がするが、岩手のローカル番組の中などでＰＲしてもよいのではと思った。計６回のシリーズということで、残り３回の放送も楽しみにしている。

○　６月２４日（土）のおとなりさんはなやんでる。「特別支援教育」を見た。東京の

小学校でのアバターやメタバース空間を利用しての自分らしい自己表現を見て、人とつながる環境を作ることができる可能性を感じた。担任の先生の、「自分のことをダメと責める子が多いけれど、方法はある。その方法さえあれば、あなたがあなたのままでいて十分すてきだよ」ということばが印象的で、あらゆる子どもが孤立せずに学んでいくことができる環境のアップデートを今後も取り上げていってほしいと思った。

○　７月１１日（火）の新日本風土記「やまがた春夏色模様」を見た。映像の力の大きさを改めて感じ、普段見ている景色、知っている人々が鮮やかにいきいきと描かれていて感動した。番組で取り上げていた植木市というお祭りは自分も毎年欠かさず行くが、祭りが開催される大型連休辺りはモノトーンの冬から一気に花咲く山形県人にとって特別な季節で、誰もが心躍る季節であり、４００年前からそれは変わっておらず、色、光、喧噪、空気感、質感と本当に素晴らしく、家族ともども改めて大切なお祭りだと感じた。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０２３年６月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

６月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１５日(木)、ＮＨＫ仙台放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、東北ココから「命輝く力に～原発被災地の訪問診療医～」も含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、７月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

副委員長　　南條　和恵（仙台大学柔道部女子監督）
委　　員　　丑田　香澄（一般社団法人ドゥーラ協会　理事）
昆野　勝栄（河北新報社　論説委員会論説委員）
佐々木裕司（東北電力株式会社　常務執行役員）
佐藤　多恵（シンガーソングライター）
武田　靖子（株式会社ジョイン 専務取締役）
永井　温子（株式会社 Ridun　代表取締役）
前川　直哉（福島大学教育推進機構高等教育企画室　准教授）
松沢　卓生（株式会社　松沢漆工房　代表取締役）

（主な発言）

＜東北ココから「命輝く力に～原発被災地の訪問診療医～」
（総合　６月９日(金)放送）について＞

（ＮＨＫ側）

飯舘村は、いまだに長泥地区で避難指示が続いているが、2017年には概ね避難解除された地域で、６年経った現在、地域の暮らしはどうなっているのかという目線で取材を始めた。ふるさとで暮らしたいという強い思いでお年寄りだけが戻ってきて不自由な生活を送っている中、訪問診療医の本田先生を軸に、今後どういった人生を送ることができるのか、それぞれが日々何を感じて生きているのかなど、被災地の実情を描こうと番組制作にあたった。

○　飯館村の人々にとって、本田先生の存在がいかに大きいか伝わってきた。先生のあり方を主軸に地域の姿を記録すること、伝えていくことは、とても大切で、東北全体と言わず、全国の方に見てもらいたいと思った。多くの方々が今回のようなテーマの番組に関心を持って、視聴する機会を持ってほしい。制作スタッフが、本田先生にスポットを当てて、先生の活動や目を通じて、地域に、人々に、ずっと伴走し続けてきたからこそ、こうして視聴者に届く番組になったと思う。

○　震災がきっかけで飯舘村に移住し、大変な環境に身を置いて奮闘している本田先生に心を打たれた。東京で２０年近く訪問診療を行ったり、東ティモールで医療に当たったという経歴は興味深く、こういった難しい現場に入っていく本田先生の信念はどういったものか知りたかった。番組で一番印象に残ったのは、肺の病気で亡くなった熊谷マキさんで、徐々に病気が進行していく様子は、見ていてとても切なかった。原発の事故がなければ、また違った人生だっただろうが、最期を飯舘の家で迎え、息子さんが「畑も存分にやったし、最期は思いどおりでよかった」と言っていたのを聞いて、本当によかったと思った。どの患者さんに対しても、その人の輝きを最期まで失わせないよう実践している本田先生はすばらしいと思った。

○　総合診療において大切なものが、本田先生のことばや態度、動作の一つ一つに表れており、とても印象的だった。手を取って「働いてきた手だね」と語りかける姿を見ていると、まさに病気ではなくて病人を診る、人を診るという医療を実践していて、地域医療やターミナルケア、末期をどう迎えるかなどについて、考えるきっかけになった。

○　本田先生の印象がとても強く、生きざまに心を動かされた。タイトルにある“命輝く”ということばの通り、患者一人一人と向き合うときに、この人の命を輝かせるという、そういう姿勢でいる医師はどのくらいいるのか、そんな医師がいたということで、とても驚かされた。病気と向き合うだけではなく、その人の輝きを、本田先生がどのように感じ取っているのか、そもそも命の輝きとは何なのかということが患者を通して描かれていたと感じた。特に、熊谷マキさんの病状が急変して自宅で息を引き取った後の、息子さんの「最期は思いどおりになってよかったと思います」ということばに、本田先生の本当の役割が集約されているような気がした。

○　本当にしっかり取材していて、とても大切な番組だが、この番組に限らず他地域の過疎や無医村との違いを描き出すことが難しくなってきていると感じた。飯舘村は、2011 年、農村の日常が突然奪われた地域で、家族が突然ばらばらになってしまった地域である。2017 年まで避難を余儀なくされて、それゆえに帰ってきている 1,500 人

は、飯舘を選んだ、飯舘で暮らしたい、もっと言うと、飯舘で死にたいと思っている人たちも少なくないかもしれない。そういったことを丁寧に描いた番組になっていたが、県外の視聴者にとっては、原発事故を忘れつつある人も多く、ほかの地域と一緒だという感覚になっても不思議ではないと思った。

○　本田先生が患者さん一人一人に寄り添うだけでなく、そこにある細やかな気遣いや気配りが随所に伝わってきた。患者さんの表情や口調がとても穏やかで、その様子から、命が輝く姿とはこういうものだと思った。原発事故が住民から奪ったのは、住む場所だけでなく、生きる希望や将来の希望ではないか。自分が住む町でも台風で田畑などに大きな被害が出て、いまだに復興が追いついておらず、これならもう何も作らなくてもいいよねとあきらめてしまいがちになってしまう。同じように、原発事故で生きがいや希望を奪われた方々も、身体だけでなく、心の健康にも影響が出てしまっているのではないかと感じた。

○　制作者から、本田先生を軸に被災地の実情を伝えたかったという話があったが、本田先生の存在感が圧倒的だったため、本田先生の人間ドキュメントとして見た。よい医者というのは病気を診るのではなくて人を診るという格言を訪問医療で体現しており、最後の「患者さんの残された命の期間の中で、何を選択されるのか、何を希望されるのかが大事になる。本来の命の輝きを取り戻せるように一緒に歩んでいく」というコメントに、先生の人生観が集約されていると感じた。先生と患者さんのやり取りを見て、医療というのは、心が通じ合った人と人との関係で、愛情と信頼が医療のベースになっていくのではないかと思った。

○　力、光、輝きなど、本田先生から語られることばがとても印象的だった。自分がどう自分らしさを維持していくのか、どう変化させていくのか、自分ならどうするかといったことを自分事として改めて考える機会になった。被災地のその後という番組ではあったが、地域医療という点では被災地以外にも通じる課題を伝えていて、本田先生は高齢なので、後に続く医師がいるのか気になった。とても大事な問題なので、今後も継続取材してもらいたい。

○　被災地という特別な場所で、穏やかに暮らせるはずだった晩年を違う形で迎えている方や、生きる気力をなくしてしまった方など、難しい現場で患者さんに寄り添っている本田先生を見て、その向き合い方がすばらしいと思った。先生と会うことで生きる力をもらっている患者さんも多く、医療というのはこうあるべきなのではと考えさせられた。小中学校や高校、大学で、教材として見てもらいたいと思った。

○　長期の取材が報われた番組になっていた。飯舘村に移住した本田先生の来歴や足跡、生き方、考え方などが、余分なことばを添えることなく表現されていて、素晴らしかった。医療とは、治療だけでないことを番組から教わり、肺の病気を抱えている患者が、先生の顔を見るとホッとすると言っていた心の安心感が最大の医療なのではないかと感じた。「患者さんが残された命の期間の中で何を選択されるのか」という本田先生のことばが番組全体を引き締めていた。

（ＮＨＫ側）

福島の人にとっては当たり前のことでも、別の地域の人から見ると違うのではないか、そういったことを言われてしまうかもしれないということは、常日頃から福島局で働く人間として意識しようと心掛けているし、今後もそうしていきたい。原発事故の後、その人の人生がどう変わったのか。避難を強いられて戻ってきたというだけではなくて、生きることに張りがなくなって、病気を治す気になれないといったことが原発事故の被災地で起きているのではないかと思ったし、今回、そういったことがうまく現場の温度を通じて伝えられればと考えた。本田先生はいま７６歳だが、８０歳まで頑張ると言っていたので、４年後、また取材したいと考えている。

＜放送番組一般について＞

○　４月２８日(金)の発見！あおもり深世界「世界が注目！　手仕事の美」(総合 7:30～7:57／青森県域）を見た。ボロについて取り上げていたが、海外で展示会を行っていることを知っている人は多くないと思うので、県民の方にボロの文化の重要性を知ってもらえるとてもよい内容だったと思う。全体として、ボロのファッションやアートとしての美しさなど、ポジティブな面を強調していたように感じたが、ボロは本来、晴れ着ではなくて、仕事着だったり、家の中で着るものだったりして、積極的に他人に見せたいものではなかったはずなので、そういった部分にも触れてほしかった。山形の庄内刺し子、青森のこぎん刺し、菱刺しと、東北には日本三大刺し子がそろっているので、次回は東北全体の文化として取り上げてもらいたい。

○　５月１９日(金)東北ココから「ウクライナからの“モノ”ローグ」(総合 7:57～8:24／東北ブロック）を見た。避難してきた人々の持ってきた大切なものは、人生の幸せな記憶や家族の記憶につながる特別なものなどで、心の癒やしや平静をもたらすという点では共通していると感じた。避難所のエピソードなどを適度に挿入することで、

単なるモノローグではなく、その背景にあるウクライナ侵攻の理不尽さも描いており、バランスの取れた構成になっていた。今回は独白のモノローグだったが、次回作では、視点を変えて、今回登場した人々が周囲と触れ合うことで、どのように変わっていったかというのを見てみたいと思った。

○　５月２６日(金) きんよる秋田スペシャル「日本海中部地震から４０年　巨大津波はやってくる　そのときあなたは？」(総合 後 6:30～6:53,7:57～8:42／秋田県域)を見た。秋田沖で命が失われた地震から４０年ということで、周囲でも改めて地震のことを考えていこうという機運はあるが、今回番組にしてもらったことは県民にとって非常に意義深いと感じた。地域密着型の防災番組として、地域特性や地震発生時のシミュレーション、津波到達予測などで、視聴者にリアルな状況を想像させていて、自分自身も防災の意識が高まった。地域防災の限界などについても取り上げており、より具体的な対策を考えるきっかけを提供していた。今後も、地域の防災意識向上に貢献できるような番組を定期的に制作してほしい。

○　５月２７日(土)の東北ココから「限界集落住んでみた　青森編」(総合 10:30～10:57／東北ブロック）を見た。山に、ゼンマイや山ワサビなど、食べるものが色々あり、山里の豊かさを感じた。一人暮らしのおばあさんたちが、週に一回温泉施設に集まって食事をしていたが、それぞれの家の漬物を持ち寄って食べ比べするのがとても楽しそうで、笑いが絶えない様子は微笑ましかった。見届け人である、エッセイストの能町みね子さんが、集落の人の知恵・プライドを感じたと話していたが、自分も番組を見て、人生を長年生きてきた方々のことばや振る舞いは、重みが違うと感じた。

○　６月１２日(月)の「はまなかあいづＴＯＤＡＹ」(総合 6:10～6:59／福島県域）を見た。冒頭の地域ニュース３本がいずれも原発事故に関するものだった。処理水の問題や避難指示の解除の問題など、まだまだ課題が山積みだが、１２年前との大きな違いは、それらがすべて福島ローカルニュースとなり、東北、あるいは日本全体で共有されなくなっているということだ。福島の原発の電気を使っていたであろう首都圏の人は、どのくらいの関心を持っているかと考えると歯がゆさがある。福島で粘り強くよい番組を作っていくということは大切だと思うが、県外にもそれを発信し、原発事故はまだ終わっていないということを、国民のみなさんに伝えてほしい。

○　５月２８日(日)ＮＨＫスペシャル「響きあう歌　－コロナ禍　喪失と再生の物語－」を見た。ＳＮＳ上で、年に 100 万首の短歌が飛び交っているという事実に驚いた。コロナ禍での孤独や寂しさを癒やすために短歌を始めた若者も多いということで、ある女子学生は「ことばを届けることで、つながれた感じを持ちたい」と語っており、

現代の若者の感性の豊かさ、コロナ禍に負けないという強さを示しているようだった。短歌は日本の伝統芸術だが、若者が身近なものとして捉え、新しいコミュニケーションの形として進化させていく過程を見ているようで、とても興味深かった。

○　５月２９日(月)の映像の世紀バタフライエフェクト「ベトナム戦争　マクナマラの誤謬（ごびゅう)」を見た。当時のアメリカ国防長官だったロバート・マクナマラの、数値にこだわるあまり物事の本質を見失っていく危うさを描いており、戦争や人種差別など、見ていてつらくなる内容だったが、とても引き込まれた。アメリカが、国力や兵力を数値化して、自国に分があると思って武力行使に出たベトナム戦争で、ベトナムの激しい抵抗にあったことは、現在のロシアとウクライナに通ずるものがあり、大切なものを思い起こすきっかけになる番組だった。

○　５月３０日(火)クローズアップ現代「私の知らない「私の息子」～急増する闇バイト・“転落”の真相～」を見た。未成年がなぜこれほど犯罪に加担しているのか、この番組を見て理解を深めることができた。番組で取り上げられた事件の加害者でもあり被害者でもある人の両親のインタビューを見て、事故から２年たったいまも受け入れられない現実、ひしひしと伝わる悲しみや、ことばを詰まらせる姿に胸が痛んだ。誰かに悩みを話すことができない、悪いことを悪いと思えないというのも問題で、番組を見ながら、もやっという気持ちになった。どうすれば子どもたちを闇から守ることができるかを深く考えさせられた番組だった。

○　６月１日(木)のＮＨＫ　ＭＵＳＩＣ　ＳＰＥＣＩＡＬ「椎名林檎」(総合 後 10:00～10:45)を見た。椎名林檎さんと劇作家の根本宗子さんとの対談が興味深かった。椎名さんは近年、楽曲を提供する側として活躍しており、「曲作りが終わったあとは、歌う人に委ねたほうが高いクオリティーのものになる」ということを力説していたのが印象的だった。アーティスト、いわばものをつくる人は、自分の技量を自分の審美眼が追い越すような成熟の仕方があって、それが椎名さんの現在の活動につながっているのかなと思った。

○　５月３１日(水) ＮＨＫアカデミア「冨永愛（前編）　自分に向き合い　美を追い求める」と６月７日(水)「冨永愛（後編）あくなき挑戦　その先にあるもの」を見た。さまざまな質問に対して、冨永さんが一つ一つ丁寧に答えていて、今後自分が壁にぶつかったときや悩んだときのマインドコントロールに役立つような話を色々聞くことができた。中でも、子どもとの接し方について、「生まれたときは目を離さない、手も離さないし、心も離さない。小学校に入ると手を離さなきゃならない、でも目と心は離さない。次の段階は、目も離さなきゃならない、でも心は最後まで離さない」

と言っていて、とてもよいことばだなと思った。冨永さんの人柄の良さが伝わってくる番組だった。

○　「アニメ　青のオーケストラ」を見ている。周囲では、小学生から高齢者まで世代を越えてよく話題になる。音がとても良くて、２話の最後の作曲家パッヘルベルのカノンの編曲は、聞いていて鳥肌が立ち、その後も番組ホームページで何度も聴いた。今後もアニメを楽しみつつ、クラシック音楽の魅力を伝えたり、その裾野を広げたりといった、番組が及ぼすプラスアルファの影響も期待したい。

○　５月２７日(土)「でも、負けねぇよ 陸前高田・よみがえる記憶」（ＢＳ１ 後 9:00～9:30)を見た。震災の記憶を呼び起こして目を向けるということ以外にも、地域に生きる方の頑張りや思いといった、人間ドラマと奇跡のような要素もあり、とても感動し、多くの方に見てもらいたいと思った。陸前高田市立博物館主任学芸員の熊谷賢さんが、自分の仕事を振り返って、嗚咽、号泣で思いがあふれ出すシーンは生々しく、その現場をカメラに収めていたことはすばらしかった。博物館、それにかけた熊谷さんの人生、そして一つ一つの展示物の貴さを、町のすべての人で共有できれば、そこに一体感が生まれ、郷土愛が育まれるのではと感じた。

○　５月２７日(土)のよみがえる新日本紀行「唐桑の七福神ー宮城県唐桑ー」を見た。５０年前の唐桑でどのような生活が営まれていたのか興味津々で視聴した。冒頭は唐桑半島の空撮から始まるが、現在と違ってドローン撮影などはなかったので、当時は大変な労力だったのではと思った。また、当時は帆立・ホヤを養殖していたが現在は牡蠣に変わっていたり、唐桑の漁業が遠洋から沿岸・近海に移っていったりと、街の変遷を感じることができた。

○　６月１日(木)スポヂカラ！「特別な日　島が一つに　～宮古島　トライアスロン」（ＢＳ１ 後 8:00～8:49)を見た。スポーツ番組だと思って見たが、トライアスロンの大会を背景に、宮古島の歴史を学べる内容になっていた。大会がここまで大きくなったのも、宮古島の環境とトライアスロンの相性がとても良かったからではないかと思った。応援、ボランティアで参加していた子どもが「僕はすぐに何でも諦めてしまうが、選手たちは最後までずっと走り切った」と述べており、スポーツをやることも大事だが、見せることもとても意義があると感じた。ロンドンブーツの田村淳さんの司会進行も心地よく、これからも見たいと思った。

○　６月１０日(土)のよみがえる新日本紀行「出作りのころー会津・檜枝岐村ー」を見た。番組の最後に、５１年後の檜枝岐村の姿がどうなったかというのが紹介された

が、観光に力を入れるという方針がずっと継続していて、尾瀬の玄関口ということで地元のそばや山菜料理を出す民宿も繁盛しており、村として子育てに力を入れている様子もよく分かった。自然環境を生かした観光の町として独特の魅力を持つ村になっていて、すばらしいと思った。

○　「ニュースウォッチ９」や「映像の世紀バタフライエフェクト」など、番組制作上のミスが相次いでいるのは非常に残念だ。完全にミスをなくすのは難しいと思うが、マンパワーが不足しているのであれば、業務量なりコンテンツの量を減らしてでも、ミスをなくしていくという強い気持ちが、ＮＨＫには求められていると思う。ＮＨＫがミスをすると、マスメディア全体の信頼性に関わり、そういったことがフェイクニュースなどの大きな課題につながっていくと考えている。“正確さ”は原点中の原点だと思うので、いま一度足元を見詰め直してもらいたい。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０２３年５月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

５月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、１８日(木)、ＮＨＫ仙台放送局において、９人の委員が出席して開かれた。

会議では、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、「２０２２年度東北地方放送番組の種別ごとの放送時間」についての報告、放送番組モニター報告、視聴者意向報告、６月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	佐藤勘三郎（株式会社ホテル佐勘　代表取締役社長）
副委員長	南條　和恵（仙台大学柔道部女子監督）
委　員	丑田　香澄（一般社団法人ドゥーラ協会　理事）
	昆野　勝栄（河北新報社　論説委員会論説委員）
	佐々木　裕司（東北電力株式会社　常務執行役員）
	佐藤　多恵（シンガーソングライター）
	武田　靖子（株式会社ジョイン　専務取締役）
	永井　温子（株式会社 Ridun　代表取締役）
	松沢　卓生（株式会社　松沢漆工房　代表取締役）

（主な発言）

＜放送番組一般について＞

○　４月２８日(金)のきんよる秋田「君の声が聴きたいスペシャル」(総合 後 7:30～8:42 秋田県域)を見た。秋田で、若者に焦点を当てた内容の番組はあまり見た記憶がなく、「推し」、「いま」、「未来」というテーマ設定も興味深かった。ただ声を伝えるだけではなく、スタジオで年齢、立場を越えた対話の場を設けたり、タイトルの通り、意見や要望に真摯に耳を傾けて関係性を生み出す機会を提供する構成になっていて、とてもよかった。専門家をスタジオに呼ぶのではなく、話しやすいお笑い芸人が対話の相手だったことも功を奏していたと思う。

○　４月２８日(金)のいわチャン「職人のソダチカタ」(総合 後 7:30～8:15 岩手県域)を見た。今回の番組は会社経営や若手の育成といった部分にも触れていて、自分も似

たような仕事をしているためとても興味深かった。鉄器や漆などの伝統工芸の手仕事は、すぐに技術が身に付くというわけではないが、粘り強くそれに取り組んでいる若者がいるということに安堵し、南部鉄器の将来は明るいと思った。番組で工芸を取り上げてくれるのは本当にありがたく、若い人が関心を持つきっかけになってほしい。

○　５月６日(土)のＤｅａｒにっぽん　吉岡里帆×ｍｉｌｅｔ出演イッキ見ＳＰ（１）「いまを駆ける～青森・十和田～」と（２）「ばばちゃんたちのそば～山形・鶴岡～」(総合 前 10:05～11:08 東北地方)を見た。「いまを駆ける」は、目標をしっかり持って何かに打ち込むことで、大きく成長できるということをしみじみと感じた。「ばばちゃんたちのそば」は、田舎の女性が助け合いながら働き続けることが、地域にとっても、自分たち自身にとってもかけがえのないものだと思った。何人かが体を壊して抜けたりするなど、ピンチな局面もあったが、頑張らないと駄目だという考え方ではなく、できる範囲でやろうとか、お互いに待とうとか、時間を苦にしない、しなやかさのような価値観で乗り切ろうとしていて、自分たちもそういった考え方を大事にしたいと思った。

○　５月１０日(水)の「はまなかあいづＴＯＤＡＹ」を視聴した。新コーナー「ふくしま、未来へ」で、性的マイノリティが暮らしやすい福島をつくろうと奮闘する女性を特集していたが、生まれ育った地元で、顔出し、実名取材に応じるのは、大変な勇気が必要だったと思う。声を上げられず苦しんでいる性的マイノリティ当事者が多くいることを知ってもらうために、取材に応じた女性に敬意を表したい。安易に専門家の声でまとめるのではなく、取材した記者自身が登場して自分のことばで説明するというスタイルも良かった。引き続き、地元マスメディアとして、こういったテーマの取材と発信を続けてもらいたい。

○　５月１３日(土)やまコレ「偏愛さんのセカイ。」(総合 前 10:30～10:57 東北地方)を見た。偏愛さんというと、個性的な人や独特な世界観というイメージがあり、どんな番組なのかと気になって視聴したが、出演されていた方たちはみんな純粋で、話していることばがとても心に響いて共感した。中でも文房具好きの方が印象的で、小学校に行っていたのは勉強するためというよりは文房具を使うためで、中学生のときに初めて自分は普通じゃないと思ったという話をしていて、本当におもしろい人だなと思った。次回作も期待している。

○　５月１３日(土)の大好き♡ 東北　定禅寺しゃべり亭～パパイヤ鈴木～を見た。多方面で活躍している方なのに、プロフィール紹介があっさりし過ぎていたので、もう少し厚みを持った説明の方がよかったのではないかと思った。彼がなぜこういった道に

進んでいったのか、両親の話や写真を交えて紹介していて分かりやすかった。個人的には、パパイヤ鈴木さんの芸名の由来を聞きたかったので、そこに触れなかったのは残念だった。

○　４月３０日(日)のＮＨＫスペシャル「“男性目線”変えてみた　第２回　無意識の壁を打ち破れ」を見た。ダイバーシティが社会の大きなうねりになっているが、日本の社会は遅れていて、政治や企業といった社会の流れの中核を担っているところでも、制度はあるが実態が全くついていっていないということを、データや取材を通じてうまく浮き彫りにしていた。こうした番組は実にタイムリーで、このままだと国際的な時流に取り残されてしまう日本の実態を他国の事例も紹介しながら丁寧な取材で分かりやすく課題提起していくということは、ＮＨＫにとって大事な役割だと思う。

○　４月１８日(火)の１００カメ「筋肉日本一　筋肉を愛し、愛される男女の物語。パワー！！」をＮＨＫプラスで見た。「あさイチ」でこの番組をＮＨＫプラスで配信しているという紹介をしていたので、気になって視聴した。芸術作品といっても過言ではない筋肉の美しさ、体をつくるまでの日々の生活の中の努力がかいま見られて、人の体はこんなにも変われるものなのかと、本番のポージングを見て感動した。大会前の数日をどのように過ごしているのか、家族とどういった会話をしているのかなど大会の舞台裏が見られて、とても楽しかった。

○　４月２１日(金)のドキュメント７２時間「岩手・大船渡　小さな新聞社にて」を見た。報道の原点である、知りたいことや見たいことを正確に伝えるという本質を見たような気がした。記者がそれぞれ地域出身だったため、より地域に溶け込んでいるからこそ書けることがあると感じ、それがローカルな新聞社の強みだと思った。若い記者の方々が謙虚に取材している様子は、仕事の向き合い方として清々しい感じが出ていた。３月１１日のサイレンが鳴り響いてフェードアウトしていくラストシーンが、とても印象に残った。

○　４月２１日(金)のドキュメント７２時間を見た。小さな新聞社の奮闘ぶりや、地域から親しまれる存在感を分かりやすく伝えていた。３月１１日というのは、新聞社にとっても特別な日で、頭をひねりながら特集を組み、地域の現状を伝えていたが、１面を最年少の記者に委ねてバトンを受け継いでいる場面からは、小さな新聞社らしい家族的なまとまりのよさが感じられた。地域に密着した情報の発信というのはメディアの原点で、震災で壊滅的な被害を受けた大船渡でもマスコミの意地を見せた新聞があったということは非常にうれしく思った。

○　４月２１(金)のドキュメント７２時間を見た。校正紙を筒に入れて下の階に手動で送る場面や、校了時間を過ぎている中で紙面に１２行の空きができてしまい、急いで原稿を書くシーンなど、視聴者をひきつける内容だった。３月１１日と地元の新聞社というのは、ある種、定番ともいえる切り口かもしれないが、全国の視聴者に震災のことを改めて伝える意義の大きい番組だったと思う。インターネットで世界中の情報が行き交う時代に地域に根付いた地元新聞の存在意義の大きさを感じられるという点でも、よい番組だった。

○　４月２３日(日)のサンドどっちマンツアーズ「大型連休！宮城と沖縄の旅行プラン対決！」を見た。パンサーの尾形さんとダチョウ倶楽部の肥後さんが案内役で、キャスティングから笑いを期待させてくれた。松島は地元だが、紹介された岩盤浴やＳＵＰ体験など、知らないものばかりで驚いた。地元の人たちが地元愛で地元を盛り上げる姿も随所に出てきたが、こういったまちおこしの原点を、バラエティー番組の中でさりげなく盛り込んでいるところに、制作者の気配りや心配りを感じた。一つの土地を取り上げる番組のよさもあるが、二つの土地を競わせるように対比した構成もとても興味深く見ることができた。

○　４月２７日(木)の魔改造の夜「トラちゃんウサちゃん５０ｍリレー」を見た。「高専ロボコン」を連想させるような企画で、とてもわくわくした。おもちゃを改造してレースで競うというだけで、こんなにもドラマが生まれるのかというほど、予想できないハプニングや涙があった。他チームのレースであっても、共に戦う者同士として完走を願う姿、失敗すると自分のことのように残念がる姿から、お互いをリスペクトしているのが伝わってきた。準備からレースを通してチームが一つになっていき、ゴール後にはオリンピックのような感動があり、すばらしい企画だった。

○　５月１日(月)のクイズ！丸をつけるだけ第１回(総合 後 7:30～8:15)を見た。スマホでも回答できるということで、視聴者がより番組に参加しやすい工夫がされていた。写真やイラストの中に必ず答えがあるため、子どもから年配者まで誰でも参加でき、家族の団らんに一役買うような番組だと思った。丸をつけるというアクションを加えることで、ただ解答を見るだけでなく、自分がその問題を解く当事者になるというのは新しい形だなと思った。

○　５月４日(木)の事件の涙　そして家族だけが残された　パリ女子学生殺人事件から４２年(総合 後 11:15～11:44)を見た。社会の理不尽、本人や家族の悔恨などがうまく表現されていて、とても分かりやすく見ることができた。事件自体は瞬間的な事象かもしれないが、その影響は本当に長く続くということが伝わってくる内容だった。

○　５月５日(金)の君の声が聴きたい　―“考える”をはじめる―(総合 後 7:30～8:52)を見た。ゲストの子ども時代のエピソードやさまざまな事例紹介、児童精神科医の小澤いぶきさんの話など、考えるきっかけが散りばめられた番組だった。子どもの声に耳を傾けることがいかに大切かというメッセージは、価値観で子どもをジャッジしていないか、自分を省みる機会になった。子どもの声を番組で取り上げるというメディアとしての姿勢が、未来につながっていってほしい。

○　５月７日(日)のサンドどっちマンツアーズ「青森市ｖｓ．板橋区　親子ツアー対決」を見た。地域を知るだけではなく、ツアーとして見せることで、実際に訪れてみたいという動機づけになると思った。２か所の地域を競わせて魅力を探る構成になっており、比較することによってそれぞれの特色が際立っていた。番組冒頭で、絶品グルメ、極上温泉といったインパクトのあるワードが出てきたが、そういうことばを使われると見る側のハードルが上がってしまうため、過度に誇張することば遣いではなく、相応の言い回しでお願いしたい。

○　５月７日(日)のサンドどっちマンツアーズを見た。アポなしの演出だったため、雪でタクシーが動けなくなったり、行こうと思ったお店が定休日だったりと、さまざまなアクシデントが起こって、番組をおもしろくしていた。全国でも好感度の高いサンドウィッチマンの名前がついた番組で、彼らの番組だから見てみようという視聴者も多いのではと思った。今回はテーマが親子で楽しめるツアーだったが、今後は、癒やされるツアーなども企画して、コロナでダメージを受けた旅行業界を盛り上げる番組に育てていってほしい。

○　５月７日(日)のサンドどっちマンツアーズを見た。新番組ということで期待を膨らませて見たが、これまでの旅番組に近くて、あまり新鮮味は感じなかった。親子で巡るというコンセプトだったので、そういう点では参考になる情報が多く、司会のサンドウィッチマンさんのトークやゲストの方のリアクションなど含めて、とても楽しく見られた。ツアーとしては、もう少し地元のディープなものを提案してほしかった。

○　５月９日(火)の１００カメ“余命”と向き合う人　人生の残り時間を意識する人たちの日常に密着を見た。気軽に見られるテーマではなかったが、余命を意識して生活している人たちが、不安と闘いながらも少しでも前向きになれる生き方を選択していたことが印象的だった。自分の夫や親、息子、自分がその立場だったらと思うことばかりで、涙なしには見られなかった。今回カメラを設置してくれた５人の生き方から、それぞれが大切に思っているもの、信念などが伝わってきた。いつか迎える自分自身

や家族の最期を考えさせられるすばらしい番組だった。

○　朝の連続テレビ小説「あまちゃん」(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 前 7:15～7:30)を見ている。１０年前も欠かさず見ていたが、全く内容が色あせず、オープニングからとてもわくわくさせられている。宮藤官九郎さんの脚本や、個性的な俳優の皆さんの演技など、ちょっとした小ネタも随所に散りばめられていて、飽きさせない工夫がすばらしい。今回の再放送で、地元の久慈市は盛り上がって観光客も増えているようで、「あまちゃん」の影響力の大きさを改めて感じた。

○　５月１３日(土)の漫画家イエナガの複雑社会を超定義「驚き！サブスク最新事情の巻」を見た。編集者役の橋本マナミさんのコメントがあまりにも早口で、字幕を表示しないと分からない箇所があった。１５分という短い時間の中に、コンパクトにまとめられていて、サブスクについてかなり理解が進んだ。レコメンド汚染の部分にもう少し言及してほしかったり、サブスク３.０のデメリットの部分にあまり焦点が当たっていなかったので、そういった点では消化不良だった。

○　５月１３日(土)の沼にハマってきいてみた「原宿通い沼　往復３時間×週４のデコラー」を見た。キャラクターのぬっしーがかわいくて、番組のアクセントになっていた。私は原宿とは縁遠い生活をしているが、番組が進むにつれ、久しぶりに原宿に行ってみたいと思わされていることに気がつき、驚いた。一見異質とも見えるものを受け入れてくれる原宿の土壌の豊かさを感じたとともに、さまざまな角度から原宿を取り上げていて、とてもすてきな番組だなと思った。

○　５月１３日(土)のワルイコあつまれ（４９）「稲垣吾郎・草彅剛・香取慎吾と学ぶ教育バラエティー」を見た。冒頭のコーナーは、埋蔵金のありかを示した地図を１０億円で売るといった内容もおもしろかったし、所々で糸井重里さんをイジる演出にも笑わせてもらった。見ていて状況が分かりやすいという設定も話に引き込まれる要因になっていた。出演しているメンバーが楽しんで演じているのが終始伝わってきて、こちらも温かい気持ちになった。新しい気付きもとても多く、また見てみたいと思った。

○　５月１５日(月)の偉人の年収　Ｈｏｗ　ｍｕｃｈ？野口英世を見た。偉人の半生を人間的な魅力も交えて紹介してくれる、大人も子どもも楽しめる歴史教養バラエティーの名にふさわしい番組だった。番組を見た人たちは、番組で紹介されたエピソードを人に話したくなるくらい、偉人が身近になるのではと思った。笑いながらも学びが深まる番組で、歴史に詳しくなくても楽しめる内容になっており、小中学生の子どもたちにもぜひ見てもらいたい。

○　４月１６日(日)の街角ピアノスペシャル「ハラミちゃん　パリを行く」(ＢＳ１　後7:30～8:59)を見た。「街角ピアノ」シリーズは、それぞれの人生模様などが、ピアノを通じて表れてくるのが好きで、いつも楽しく見ている。今回のスペシャル版も、街角にあるピアノ１台をきっかけに、人と人の距離が縮まったり、ことばや年代の壁を越えた交流が生まれたりして、ピアノの持つ力を感じた。ハラミちゃんの演奏もとても良く、現地のアーティストの人たちとの即興での連弾など、随所に見せ場があり、こういったものが筋書きなしで描けるのも、ピアノの力なのかと思った。

○　３月２４日(金)業の花びら ～宮沢賢治 父と子の秘史～(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 11:00～25日(土)前 0:29)を見た。「雨ニモマケズ」などと比べると知られていない作品だが、とても興味深く見た。宮沢賢治は今年没後９０年で別の作品が映画化されたりしているが、そういった注目を集める年に、性的少数者としての側面を持った宮沢賢治の愛と性について切り込んだ内容になっていて、見応えがあった。

○　５月１３日(土)の武将温泉～名将の陰に名湯あり～（２）(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 6:00～7:29)を見た。温泉の効能や精神的な部分に与える効果などをうまく伝えていた。こういう番組で大事になってくるのは、温泉について分かりやすく解説してくれる専門家や研究者にどういう人をもってくるかだと思うが、今回は、どの地域も地元の武将と温泉をひもづけるような専門家を立てていて、さすがだと思った。伊達政宗の秋保温泉については、秋元才加さんがレポーターだったが、もともと歴史物が好きだということもあり、はまり役だった。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局

２０２３年４月ＮＨＫ東北地方放送番組審議会

４月のＮＨＫ東北地方放送番組審議会は、２０日(木)、ＮＨＫ仙台放送局において、７人の委員が出席して開かれた。

会議では、東北ココから「気仙沼タクシードライバー　２０２３春を走る」も含め、放送番組一般について活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、５月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長　　佐藤勘三郎（株式会社ホテル佐勘　代表取締役社長）
副委員長　　南條　和恵（仙台大学柔道部女子監督）
委　　員　　丑田　香澄（一般社団法人ドゥーラ協会　理事）
佐々木　裕司（東北電力株式会社　常務執行役員）
佐藤　多恵（シンガーソングライター）
永井　温子（株式会社Ridun　代表取締役）
前川　直哉（福島大学教育推進機構高等教育企画室　准教授）

（主な発言）

＜東北ココから「気仙沼タクシードライバー　２０２３春を走る」
（総合　４月１４日(金)放送）について＞

（ＮＨＫ側）

今回の番組は、車の中から地元を見続けてきたドライバーの視点で気仙沼を見つめ直すというコンセプトのドキュメンタリーだ。企画されたきっかけは、ディレクターが気仙沼でタクシーを使ったときに聞く気仙沼の話がとても新鮮で興味深く、ネットに載っていないような情報や改めて気付かされることが多かったことだ。震災のイメージが強い気仙沼を別の視点から伝えたいと番組化することにした。

○　番組の主軸ではないが、タクシーそのものの役割の重要性を感じられたのが印象的

だった。地域の人同士のコミュニケーションだけではなく、地域外の人たちへのツアーの案内役も担っていて、タクシーそのものの可能性を改めて感じた。過去の出来事も抱えつつ、今後もそれを忘れず走り続ける、進んでいくといった思いが、運転手の様子を通じて私たちにメッセージとして届くような内容だった。

○　東日本大震災から１２年が経過したいま、タクシードライバーの視点という新たな手法を通して、現在のありのままの気仙沼を知ることができた。タクシードライバーに、乗客の話に耳を傾ける役割、話し相手というような側面があることは、これまであまり意識したことがなかった。被災地をタクシーで回りたいという需要に応えて被災地ガイドを続ける様子から、ドライバーの方々の生きざまの一端に触れた気がした。全体を通してとても温かい雰囲気で、ナレーションのＹＯＵさんの語り口も相まって柔らかい気持ちで視聴することができた。

○　震災前の気仙沼しか知らないので、町がどう変わったかというのを見つつ、昔の面影が残っている部分もあり、とても懐かしい気持ちで番組を見た。タイトルの、「春を乗せて走る」というイメージどおりの内容で、土地柄や人柄、震災後の町の様子がきれいに表現されていて、あっという間の３０分だった。空と海の水色のコントラストがすばらしく、人びとの触れ合いがすてきだと思った。ＹＯＵさんのナレーションは、声がとても番組に合っていて印象的だった。

○　気仙沼は、何度も通った思い入れのある町であり、そんな自分のよく知った町が舞台ということで、関心を持って見た。住民にとっては日常の町であり、しかし見学者にとっては被災地で、地元の人にとっても大切な人を亡くした土地という、気仙沼の多重で多様な姿がタクシードライバーを通してじんわりと伝わってくる、とてもよい番組だった。私自身、気仙沼にまた行きたいという思いを強くしたが、同じように思った視聴者も多かったのではないか。

○　冒頭のＢＧＭとタクシーの中での何気ない会話に、ＹＯＵさんの柔らかな語りがマッチしてとても癒やされた。車内をさまざまな角度から撮影していて、乗客の自然な表情やドライバーの仕草などが事細かに見られたのが印象的だった。震災のガイドのシーンは、地元の人だからこそ話せる貴重な話も多く、気仙沼のドライバーならではと強く感じた。ちぎり絵のプレゼントは、来てくれてありがとうという気持ちや、こういう現状を知ってほしいという思いなどが詰まっているのかと思った。タクシードライバーというこれまでになかった視点で震災を感じることができた番組だった。

○　気仙沼には一度しか行ったことがないので、自分がタクシーに乗った気分で楽しみ

ながら見た。タクシードライバーと乗客の触れ合いを軸に、町の生活に根づくタクシーの姿を等身大で伝えていて、運転手のそれぞれのキャラクターや、なじみの乗客、旅行客との取り留めのない対話などをうまくつなげながら流れを作っていて、大変引き込まれるよい番組だった。のんびりと日常を包み込んだ番組ではあったが、高齢者の足となって日常を支えるタクシー運転手もまた高齢という、切実な地方都市の実態も伝わってきて、十年後や二十年後を想像すると、複雑な気持ちになった。

○　優しい視線が随所に感じられた番組で、とても穏やかな気持ちになった。昭和の頃のにぎわっていた映像と、震災も含めてなかなか思い通りにならない現在の映像がうまく対比されていた。乗る人も乗せる人も高齢化していて、外国人の乗客でも、観光客もいればそこで働いている外国人もいるという、気仙沼のリアルが描かれていた。高齢のドライバーが多かったので、もう少し若い人も見てみたいと思った。番組告知の中で、気仙沼は人口に対してタクシー会社が多いという話があったが、なぜ気仙沼にタクシー会社が多いのかなど、番組本編でも触れてほしかった。

○　地方のタクシー会社ならではのエピソードとして、タクシーの車内という独特の空間でのやりとりをかいま見る楽しさと共に、地方のリアルな現状を映し出していた。昔の魚市場や飲み屋街の映像を織り交ぜることによって、気仙沼の栄枯盛衰を感じ取れた。タクシー内に設置された定点カメラが工夫されていて、固定のアングルだけではなく、回転するものもあり臨場感があった。運転手自身も被災者であるという複層的なエピソードがあって、自ら被災現場を案内して語り部となっているのはすばらしいと思った。震災で亡くなった親友の墓参りをしたり、亡くなった運転手のタクシーの番号を永久欠番にしたり、そういうエピソードにも胸を打たれた。ＹＯＵさんの優しい語り口のナレーションと、日食なつこさんの歌は温かい雰囲気を出しており、晴天の気仙沼の景色とマッチしていた。

○　普段何気なく使うタクシーだが、ドライバーから見た日常という視点が新しくて興味深く、とてもおもしろかった。ドライバーのみなさんはコミュニケーション力が高く、人の役に立つことにやりがいを感じている様子が伝わってきた。地元の人たちにとってなくてはならない存在であるとともに、人間味が出る仕事なのだと思った。高齢化社会で、なくてはならないのがタクシー業界だと思うが、ドライバーの高齢化や人手不足は課題だと感じた。都会のタクシードライバーとは違い、街の人を守る、支える、地域の魅力を伝えるという役割もあることが新たな気付きだった。被災地である気仙沼の思いも背負って、明るく仕事をしている様子から私自身も元気をもらった。

（ＮＨＫ側）

カメラは、普段だともう少し全体が見渡せるような撮り方をするが、今回はドライバーが軸ということで、ドライバーはもちろん、タクシーの空間や景色にできるだけ目が行くようにした。取り上げたタクシー会社のドライバーの平均年齢が６３歳で最年少の方でも５０代、ジェンダーバランスについても議論したが、全員男性で年代も一緒、そこがある意味、現在の気仙沼を象徴していたので、今回は同世代の方を取り上げることにした。被災地としての気仙沼に足を運ぶ人はまだまだ少なくないが、震災以外を目的に気仙沼に行ってみたい、そう思ってもらえるきっかけに少しでもなったらありがたい。今後もさまざまな角度から東北の各地を取り上げていきたい。

＜放送番組一般について＞

○　３月１７日(金)きんよる秋田「しったげすげぇ！ひと自慢」(総合 7:30～8:42 秋田県域)を見た。「お願いします、次の人を紹介して」と、取材を受けた人が魅力的だと思う秋田県の人を数珠つなぎで紹介していく構成で、人の輪が温かく広がっていくさまにとても好感が持てた。このような、視聴者が地域の魅力を知ることで地元の人びとに出会い直すような情報を、地方局発でぜひ発信し続けてもらいたい。一方で、表裏一体にはなるが、知り合いが知り合いを紹介するので、似た価値観の人が連続するといった部分もあるのではと思った。

○　３月２４日(金)東北ココから「あなたの町の映像アルバム山形・福島編」を見た。山形県朝日町の７０年前の風景からスタートして、町の人たちが総出で稲刈りをする様子は、教科書を見ているような感じがして、とても興味を持った。出演されていた地域の方々はもちろん知らない人たちだが、そういった方たちのリアクションでも楽しく見られるのはおもしろいなと思った。昔の映像について、地域の歴史の保存という面ではもちろん、家族や友人、個人的な思い出を掘り起こすという意味でも、改めて番組の重要性を感じた。

○　４月７日(金)東北ココから「純烈の東北であったまろう旅　岩手・湯田温泉峡編」を見た。駅に隣接した温泉や、温泉の中の電車の時刻を知らせるための信号機など、地元の人しか知らない情報が盛りだくさんでおもしろかった。雪納豆については興味深く見たが、塩で食べるとおいしいとか、糸の引き方が細くきれいに見えるとか聞く

と、なかなか手に入らないということも相まって、現地に行ってぜひ食べてみたくなった。人口減少や災害で温泉や観光業を守れなくなる現実、それでも集落で温泉を守ろうとする心意気といったエピソードを聞くと、足を運んで応援したい気持ちになる。「東北であったまろう旅」というタイトルにぴったりな内容なので、今後の旅も楽しみにしたい。

○　４月７日(金)東北ココからを見た。自分は東北のことを分かっているつもりになっていたが、湯田温泉峡は、湯本温泉や湯川温泉、巣郷温泉など８つの温泉の総称ということや、駅舎の中に信号が付いている温泉施設があること、雪納豆の存在など、初めて知ることが多かった。昔は道後温泉もそうだったが、地方に行くと温泉がベースになって同心円状に街並みができており、番組では地域のみなさんがそういった部分を守ろうとする姿がよく伝わってきた。出演者の純烈さんは温泉と相性が良く、そのキャラクターで、こちらまで温かい気持ちにしてくれる。全体を通して心温まる内容になっていて、楽しく見させてもらった。

○　３月２０日(月)あの日、偶然そこにいて（４）「“ヒルズ族”のジェットコースター人生」(総合 後 10:00～10:29)を見た。取材対象となったヒルズ族の若者に共通していたのは、アニマルスピリットや風を読む力、アグレッシブさ、ほとばしる野心などで、これは現在の日本に欠けているものでもあると思うため、頼もしさを感じた。シリコンバレーがそうであるように、いつの時代もクオリティーの高い多様な人材の交流の中からイノベーションは生まれており、当時の日本では六本木ヒルズがその舞台の一つになっていた。そういう意味では、東北でも若き起業家の交流の場を作るということが、地域の成長戦略の真髄かもしれないと改めて感じた。

○　３月２９日(水)病院ラジオ「東北大学病院編」(総合 10:00～10:59)は、ご当地の東北大学病院がロケ地だったので、録画して楽しみに視聴した。サンドウィッチマンさんの明るいキャラクターに加えて、テンポの良さや適度なユーモア、相手の立場に立った優しいことばのやり取りで、出演者の心からの思い、本音を引き出す対話術は見事だと感心した。出演者のみなさんからは、病気や障害を受容して前向きに生きようとする心の変化が伝わってきて、それらを淡々と語る態度やことばには強さが感じられた。健康であること、生きることの意味を改めて自問させられ、内容も非常に重いものだったが、とても心に響く番組だった。

○　４月７日(金)アナザーストーリーズ　運命の分岐点「クイーン　２１分間の奇跡～ライブエイドの真実～」を見た。伝説と呼ばれるグループや人、出来事には、やはり相応のストーリーがあり、何年たっても色あせないものだと感じた。亡くなってし

まったボーカルのフレディさん以外のメンバーのインタビュー映像はとても貴重だった。ＮＨＫは、「アナザーストーリーズ」以外でも、過去の大きな事件やニュースを深く掘り下げる番組を放送しており、若い頃はあまり興味がなかったものや、知りたいとも思わなかったことを、私もそうだが、年齢を重ね関心を持ち始める人もいるので、今後もそういった番組を放送していってほしい。

○　４月１０日(月)鶴瓶の家族に乾杯「あいみょんが秋田県五城目町で子どもと遊びお米をいただく旅！」を見た。多くの子どもたちが登場して、元気があふれていた番組だった。地元の方々と移住者の方々とが、五城目という町を通じて、自分たちにとっての家族の形、地域の形を作っているということが伝わってきた。自分も改めて地域との関係性や文化との関わり方を見直してみたいと思うきっかけになった。

○　４月１１日(火)のクローズアップ現代「異次元のＡＩ・ＣｈａｔＧＰＴ▽小説や作曲まで！その力に迫る」を見た。ＣｈａｔＧＰＴにより、これまでとは比較にならない、すさまじい変化、パラダイムシフトを感じざるを得ない。番組では、技術の活用、展開への期待だけでなく、すでに起こっている問題、起こりうるリスク、向き合い方まで、具体的に良くまとめられていて分かりやすかった。先日、自分でも試してみたところ、仮説をしっかり可視化してもらえたと感じたが、それを正解と鵜呑みにしてしまえば思考停止になるという危機感も覚えた。山形県の小学校でＣｈａｔＧＰＴを活用した様子が出てきたが、まさにそういった危惧を取り上げていた。「解決策を求めてしまうとこの先もずっと頼ってしまう」「自分で解決したほうがきちんと話せる」と、現状をしっかり捉えている子どもたちのコメントにはホッとしたが、ＡＩの第一人者である東京大学の松尾先生の「ルールを作りながらぜひ積極的に使ってほしい」というコメントは、犯罪などリスクの部分にあまり触れないままに断言しており、気になった。

○　３月２４日(金)【特集ドラマ】生理のおじさんとその娘(総合 後10:00～11:13)を、タイトルのインパクトが強くて、気になって見た。一見コミカルな作品に感じたが、生理についての考え方がとても深く散りばめられていて、年齢や性別を問わず、先入観なく見ることができるドラマだった。生理を通して、体が異常やサインを伝えることもあり、病気の早期発見にもつながるということを取り上げていたが、具体的な事例の紹介など、もう少し掘り下げてほしかった。最後に主人公の娘が、実は同性愛者だったということを想起させる展開で幕を閉じたが、唐突感が強く、生理の話との関係性や、話がどこに向かったのか、うまくくみ取れなかったので、続編があればぜひ見てみたい。

○　４月１４日(金)超多様性トークショー！なれそめ「元警察官＆元消防士！同性カップル」を見た。男性同士のゲイカップルが登場していたが、同性愛者として幸せに生きているロールモデルともいえるような、素敵な二人だった。番組では、この二人を田村淳さんやＬｉＬｉＣｏさんたち出演者のみなさんが、自然体に、当たり前のこととして受け入れていて、とてもうれしい気持ちになった。友達にも言えない、家族にも言えないという当事者はまだまだいるが、少しずつ変わってきている、それが体現されている番組ですばらしかった。

○　４月８日(土)津波ピアノ～坂本龍一と東北の７年～(ＢＳﾌﾟﾚﾐｱﾑ 後 11:30～9 日(日)前 0:03)、2018 年に放送された番組の再放送を見た。改めて視聴し、偉大な音楽家であることを再認識させられた。震災後何度も東北に足を運び、継続的に東北に関わっていたのは知っていたが、津波ピアノの経緯はこのドキュメンタリーで初めて知った。ピアノを現代アートとして残したいと動いた坂本さん側だけではなく、農業高校の先生の受け止めも含めてきちんと紹介されており、バランスが取れていると思った。当時吹奏楽部だった卒業生が、「被災遺構を残したり地元が観光地化したりするのがとても嫌だったが、ピアノが良い残し方をされたことで、残すことも悪いことばかりじゃないと思った」と語っていたのが印象的だった。坂本さんご自身は忘れ去られても全然構わないとおっしゃっていたが、坂本さんが残した音楽や活動は今後も次世代に継承されていくべきものであるし、東北と坂本さんの関わりも貴重なアーカイブとして残してほしい。

○　番組ではないが、最近メディアで取り上げられることも多い対話型ＡＩについて、使っていると、ＮＨＫのニュースでアナウンサーが話しているのと似ており、予想を裏切る答えはあまり返ってこず、全体的にきれいに収まっているなと感じる。さまざまなことを言いつつ、「専門家の意見を聞くことも大切」とまとめるなど、型破りな回答はほとんどなさそうだと思った。

ＮＨＫ仙台放送局
番組審議会事務局